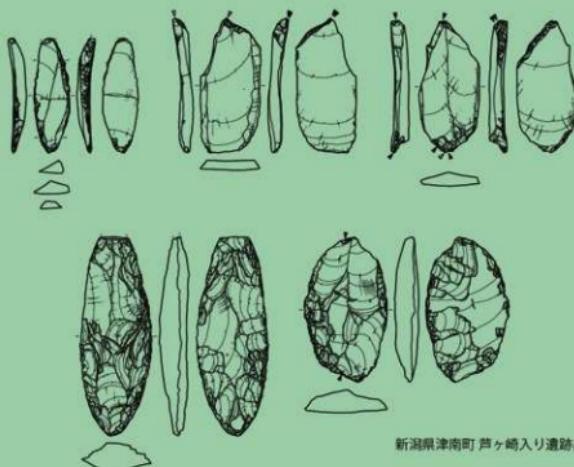


第35回 東北日本の 旧石器文化を語る会

＜予稿集＞



新潟県津南町 芦ヶ崎入り遺跡出土石器

2021年12月25日
於：オンライン開催

東北日本の旧石器文化を語る会

第35回 東北日本の旧石器文化を語る会 オンライン大会 開催要項

1 日 程 2021年12月25日（土）

2 会 場 オンライン会議システムによる開催

3 主 催 東北日本の旧石器文化を語る会

4 次 第 （氏名に下線は口頭発表者）

受付 10:45～

開会 11:00

話題提供「東北日本における旧石器時代遺跡の調査と研究」

11:10～11:40 「秋田県才ノ神遺跡」

巴垂子（秋田県教育庁文化財保護室）

11:40～12:10 「山形県水林下遺跡」

大場正善（公益財団法人山形県埋蔵文化財センター）

12:10～13:30 （昼食休憩・情報交換）

13:30～14:00 「福島県笛山原遺跡No.16 第20次調査」

洪 恵媛（東北大）・工藤雄一郎（学習院女子大）・藤原妃敏・会田容弘
(郡山女子大学短期大学部)

14:00～14:30 「福島県町畠・吉治下遺跡」

上田優喜（公益財団法人福島市振興公社）

14:30～15:00 「新潟県芦ヶ崎入り遺跡」

佐藤信之（新潟県津南町教育委員会）

15:00～15:20（休憩）

15:20～15:50 「北海道常呂郡置戸町田付遺跡出土の石器について」

中沢祐一・矢原史希（北海道大）

15:50～16:20 「山形県酒田市八森A遺跡 2021年度発掘調査」

金彦中・瀧谷侑奈・傍島健太・戸塚瞬翼・谷津愛奈・趙娜・郭昕怡・グレコ
ジエルマナ・館内魁生・洪恵媛・鹿又喜隆（東北大大学院文学研究科）・
佐野勝宏（東北大東北アジア研究センター）・渡部裕司（酒田市教育委員会）・
佐々木繁喜（一関市文化財調査員）

16:20～16:50 質疑応答

閉会 16:50

情報交換会 18:30～

目 次

話題提供「東北日本における旧石器時代遺跡の調査と研究」

秋田県才ノ神遺跡	1
巴 亜子（秋田県教育庁文化財保護室）	
山形県水林下遺跡	9
大場正善（公益財団法人山形県埋蔵文化財センター）	
福島県笛山原遺跡 No.16 第 20 次発掘調査	23
洪 惠媛（東北大大学）・工藤雄一郎（学習院女子大学）・藤原妃敏・会田容弘 （郡山女子大学短期大学部）	
福島県町畑・吉治下遺跡	31
上田優喜（公益財団法人福島市振興公社）	
新潟県芦ヶ崎入り遺跡	37
佐藤信之（新潟県津南町教育委員会）	
北海道常呂郡置戸町田付遺跡出土の石器について	44
中沢祐一・矢原史希（北海道大学）	
山形県酒田市八森 A 遺跡 2021 年度発掘調査	53
金彦中・瀧谷侑奈・傍島健太・戸塚瞬翼・谷津愛奈・趙娜・郭忻怡・グレコジェ ルマナ・館内魁生・洪惠媛・鹿又喜隆（東北大大学院文学研究科）・佐野勝宏（東 北大東北アジア研究センター）・渡部裕司（酒田市教育委員会）・佐々木繁喜（一 関市文化財調査員）	

秋田県才ノ神遺跡

秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室 巴 亜子

1 才ノ神遺跡の概要

才ノ神遺跡は、秋田県南部の日本海に面する由利本荘市徳沢字才ノ神に所在する（図1）。才ノ神遺跡は国道105号の南側に位置し、標高約20mの河岸段丘上に立地する。

遺跡の所在する由利本荘市の面積は1209.60km²あり、25市町村中県内最大である。遺跡の西側には一級河川子吉川の支流、芋川が流れている（図2）。芋川は総延長44kmあり、横手市、大仙市との境近くに源を発し、軽井沢川の合流地点からは国道105号に沿うように流れ、遺跡の9km下流で子吉川と合流し、日本海へ注ぐ。

遺跡周辺での芋川の旧流路は、江戸時代中期までは北西から南東に張り出す丘陵を迂回するように流れていた。元文年間（1736～1741）に新田開発のため遺跡の西側が開削されて、現在の流路となっている。

遺跡が所在する土地は明治12年から学校の敷地として利用されており、昭和35～55年には秋田県立本荘高等学校大内分校のグラウンドとして使用されていた。大内分校の側溝工事で石棒が出土したことにより遺跡が発見された。その後、昭和52年の試掘で分校の北側畑から縄文土器片が出土している。

才ノ神遺跡の所在する由利本荘市では、現在549か所の遺跡が確認され、うち8か所が旧石器時代の遺跡として登録されている。遺跡の所在する旧大内町内では旧石器時代の遺跡が2か所の確認されている。遺跡の西2kmに位置する岩洞河原遺跡は、旧石器時代と平安時代の複合遺跡として登録されているが、発掘調査は行われていない。



図1 遺跡位置図

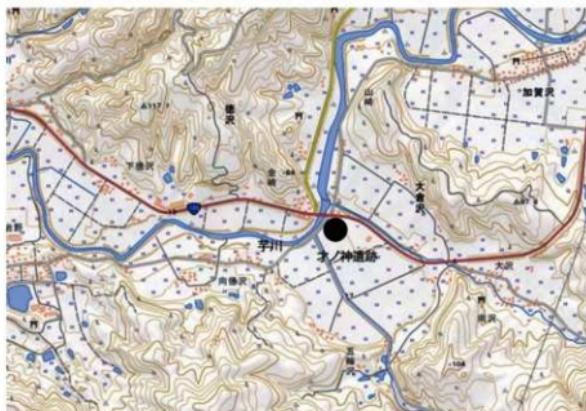


図2 才ノ神遺跡位置図

遺跡の周辺では縄文時代、平安時代、中世城館が確認されており、いずれの遺跡とも河岸段丘上に立地している。



図3 オノ神遺跡周辺遺跡分布図（秋田県県遺跡地図情報に加筆）

オノ神遺跡では、秋田県教育委員会、由利本荘市教育委員会により3度の発掘調査が実施されている（図4）。昭和54（1979）年には国道105号線バイパス工事に伴って秋田県教育委員会による調査が行われた。調査の結果、堅穴建物跡13棟、土坑8基等が検出され、縄文時代前期及び中期の集落跡であることが確認された。土坑内からは長さ73cmの石棒が立位のまま出土しており、土壙墓の可能性が考えられる。遺構外から旧石器時代とされる遺物が1点出土している（図5）。

平成29（2017）年の本荘消防署大内分署建設事業に伴う由利本荘市教育委員会による調査では、縄文時代早期の焼土遺構や縄文時代前期の堅穴建物跡・土器埋設遺構等が検出されている。



図4 オノ神遺跡調査位置図

令和元（2019）年と令和2（2020）年の調査は、芋川の河川改修工事に伴って秋田県教育委員会による調査が行われた。令和元年の調査では、焼失家屋を含む堅穴建物跡10棟、土坑14基などが検出され、縄文時代中期の集落跡であることを確認した。

令和2（2020）年の調査では、前年度調査範囲をさらに掘り下げ、旧石器時代の石器集中部1か所、縄文時代前期の捨て場1か所、焼土遺構3基、土坑4基などが検出されている。



図5 旧石器時代とされる遺物

2 令和元年・2年の調査

令和元年および2年に実施された秋田県教育委員会による調査は、芋川の河川改修工事に伴って実施したもので、同一範囲を2年にわたり調査したものである。

令和元（2019）年調査は、6月10日から10月3日まで行われた。調査面積は1,290 m²である。

令和2年（2020）調査は、5月16日から9月30日まで行われた。調査面積は1,250 m²である。

才ノ神遺跡の基本層序はI～XI層に区分した。（図6）。

I層：褐色砂質シルト しまり強 粘性弱 亜角礫40%含む（20cm）

II層：黒褐色粘土質シルト しまり強 粘性弱 褐色ブロック含む（20cm）

III層：褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性中 混入物なし（10cm）

IVa層：褐色シルト しまり中 粘性中 混入物なし（30cm）

IVb層：褐色シルト しまり強 粘性中 小礫1%、遺物含む（20cm）

IVc層：褐色シルト しまりやや強 粘性中 炭化物粒1%、

燒土粒1%含む（20cm）

V層：にぶい黄褐色砂 しまり中 粘性弱 小礫40%含む（20cm）

VI層：にぶい黄褐色砂 しまり中 粘性やや弱 炭化物粒10%含む（20cm）

VIIa層：褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性中 混入物なし（10cm）

VIIb層：褐色粘土質シルト しまり中 粘性やや強 黄褐色粘土ブロック含む

（20cm）

VIIc層：褐色粘土質シルト しまり中 粘性中 小礫5%含む（20cm）

VIII層：暗褐色粘土質シルト しまり中 粘性中 混入物なし（20cm）

IX層：黒褐色シルト しまりやや強 粘性中 遺物（縄文土器、石器）、

小礫10%、燒土粒3%含む（10cm）

X層：にぶい黄褐色粘土質シルト しまりやや強 粘性やや強

小礫10%含む（20cm）

XI層：黄褐色粘土 しまり強 粘性やや強 小礫5%含む（10cm～）

I
II
III
IVa
IVb
IVc
V
VI
VIIa
VIIb
VIIc
VIII
IX
X
XI

図6 柱状図

I～III層は調査区全域で確認され、黒褐色や褐色シルトで現表土および造成土である。IV層はいずれも褐色シルトであるが、混入物によりa～cに細分され、IVc層上面で縄文時代中期の遺構が確認された。出土した土器や炉の形式などから縄文時代中期後葉と想定される。V・VI層は無遺物層で粒径の荒い砂が堆積しており、河川堆積によるものと考えられる。VII層は褐色粘土質シルトであるが、混入物によりa～cの3つに細分される。VIII層は、暗褐色土である。IX層は縄文時代前期の遺物包含層で、調査区西側の沢斜面に堆積する。X層は漸移層である。XI層は黄褐色粘土の地山である。旧石器時代の遺物はX・XI層で出土している。

旧石器時代の地形は、調査区の北から南へ傾斜していることを確認した。また、調査区の東端に旧石器時代の沢状地形を確認した。

旧石器時代の遺物は、基本層序のX層およびXI層から出土した。遺物の集中地点は調査区中央付近のLR45 グリッドを中心とした約8m四方である(図7)。

旧石器時代の遺物の総点数は336点、内訳は石刃35点、ナイフ形石器35点、彫刻刀形石器3点、RF29点、石核17点、MF3点、チップ1点、フレイク212点、ドリル1点である。



図7 旧石器時代遺物集中範囲



圖 8 遺物出土狀況



圖 9 遺物出土狀況



圖 10 石核出土狀況

接合個体は、28 個におよび、特に接合個体 1 ではナイフ形石器やフレイク、石刃など合計 62 点が接合した（図 11・12）。打面の再生を行なながら、單一方向から石刃を連続して剥ぎ取っていたことが接合により確認された。連続して石刃を取れば原石が割れた個体があることを確認した。石器集中部の範囲外からも石刃を素材とし、折り取り両側縁に刃潰し加工が施された二側縁加工のナイフ形石器が出土した（写真 17）。石刃や剥片の石材は、珪質頁岩が主体である。



図 11 接合個体 1 接合状況 1



図 12 接合個体 1 接合状況 2



図 13 接合個体 4 接合状況 1



図 14 接合個体 4 接合状況 2



図15 接合個体5 接合状況



図16 接合個体6 接合状況



図17 ナイフ形石器

おわりに

令和元・2年に調査を行なった才ノ神遺跡は、現在整理作業が行われており、遺物の器種ごとの数は今後変動する可能性がある。

今回の報告にあたり、写真および図面は秋田県埋蔵文化財センターから提供をいただきました。

【文献】

大内町史編さん委員会 1990 「大内町史」

由利本荘市 2015 「由利本荘市誌」

秋田県教育委員会 1980 秋田県文化財調査報告書第71集「才の神遺跡発掘調査報告書」

遊佐町水林下遺跡

(公財) 山形県埋蔵文化財センター 大場正善

【調査要綱】

遺跡名：水林下遺跡（遺跡番号 461-078）

所在地：山形県飽海郡遊佐町吹浦字水林下

調査起因：日本海沿岸東北自動車道遊佐象潟道路

調査期間：第1次調査・令和2年6月30日～11月27日

第2次調査・令和3年6月15日～11月30日

調査面積：第1次調査・1,460 m²、第2次調査・2,410 m²

調査主体：公益財団法人山形県埋蔵文化財センター

調査担当：第1次調査：氏家信行・渡辺和行、第2次調査：氏家信行・大場正善

調査協力：国土交通省酒田河川国道事務所、山形県観光文化スポーツ部文化振興・文化財活用課、
山形県庄内教育事務所、山形県庄内総合支庁保健福祉環境部環境課、遊佐町教育委員会・地域生活課

1 遺跡の立地と周辺環境

（1）遺跡の位置

水林下遺跡は、秋田県境に近い山形県遊佐町の女鹿地区（吹浦字水林下）に所在し、遺跡より東に「庄内富士」とも呼ばれ、「日本百名山・日本名百景」の一つに数えられる鳥海山の西麓にあり、鳥海国定公園特別地域内に位置する（図2、写真2～5）。本遺跡より西に約300mのところには、日本海を擁し、その海岸からは、山形県唯一の有人島である飛島を望むことができる（写真2～4・7）。遺跡が立地する標高は約20m。

（2）周辺環境

本遺跡より東に約100m離れたところの湧水地より引水した、女鹿地区の「神泉の水」と呼ばれる集落共同の洗い場があるように、本遺跡近隣、および遊佐町内には多数の湧水が存在することで有名である。本遺跡周辺一帯は、近現代頃に広く開拓され、畑地や水田の造成によって土地改変が行われている。調査地においても、近年まで畑地として利用されていた。ただし、現在遺跡周辺は少なくとも国土地理院で公開している航空写真で確認する限り、昭和36年～48年の間に植林が行われており、耕作地が激減し、杉を中心とする二次林が広大に拡がっている。

本遺跡は、約9万年前に鳥海山より噴出した「大平溶岩」で形成した溶岩台地上に位置し、北側には約3千年前に噴出した「猿穴溶岩」の溶岩台地が対地する（図3・4：中野・土谷1992、林・山本2008）。昭和22年撮影の航空写真では、流れ出た溶岩や溶岩の礫が確認できる（写真1）。大平溶岩と猿穴溶岩の間は谷地形となって、小規模な低湿地が形成している。低湿地はかつて水田として使われていたが、現在はヨシを主とする植物が生い茂っている（写真5の左下）。本遺跡が立地している場所は、大平溶岩台地の北斜面地に相当するものの、石器群が検出された地点は、西にわずかに傾斜する浅い崖地状の地形を呈している。

2 調査の発端と経緯

(1) 調査の発端

今回、国土交通省酒田河川国道事務所による日本海沿岸東北自動車道佐象潟道路の建設にともない、本遺跡の発掘調査を山形県観光文化スポーツ部文化振興・文化財活用課より委託を受け、公益財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を行った。令和2年度には第1次調査を、翌令和3年度に第2次調査を行った。令和4年度には、第3次調査を予定している。

(2) 調査の経緯

調査では、調査区をA～C区に分け、さらにC区を西・東・北に細分（図5）。第1次調査ではA区とB区、第2次調査ではC区東・西の調査を行い、第3次調査においてC区北の調査。およびC区東（旧石器）の補足調査を行う予定である。調査の手順としては、重機によるI～III層の除去後、IV層より手掘りで掘り下げを行った。上層からは、調査区全体で繩文の大型土坑、古代（9～10世紀頃）の堅穴建物跡、近現代の柱・杭跡、溝跡などの遺構・遺物が検出された。旧石器は、第1次調査で調査区の南東側に当たるB区から、第2次調査でB区に隣接するC区東の南側より発見された（図5～8、写真8・10～26）。なお、旧石器が出土したB区・C区東では、おもに近現代の柱・杭跡、溝跡などが検出された。

3 調査の成果

(1) 出土層位

石器群が出土した地点の基本層序は、I層：黒褐色シルト（表土）、層厚：約20cm、II層：黒色シルト（耕作土）、層厚：約15cm、III層：黒褐色シルト（クロボク土1）、層厚：約25cm、IV層：黒色シルト（クロボク土2）、層厚：約10cm、V層：暗褐色シルト質粘土（漸移層）、層厚：約10cm、VI層：褐色粘土、層厚：約15cm、VII層：褐色細砂質粘土、層厚：約20cm、VIII層：にぶい橙色粘土、層厚：約10cm、IX層：明褐色礫交じり細砂質粘土（礫層：火山泥流の可能性）、層厚：20cm以上（写真9）。旧石器は、V層からVI層にかけて出土している。またIII～IV層、およびIX層には、鳥海山の火山泥流に由来すると考えられる径数cm大から1m大の安山岩亜角礫を多量に含む。

鳥海山は、頻繁に火山活動を起こしていることが知られている（図3：中野・土谷1992、林・山本2008）。III層から下位の層はプライマリーなマトリックスを呈しているが、礫や遺物などに対する火山泥流等による多少の影響があったことが考えられる。実際に、遺物は60cm程度のレベル差をもって出土していたり、直立した状態で出土していたりしているのが確認された（図8、写真22・24・27）。そのため、本来の原位置は保っておらず、埋没後の移動を考慮しなくてはならない。ただし、石器の表面には微細な傷や縁辺部の微細剥離痕などの転磨痕が認められないため、ある程度は位置を留めていたと考えられる。なお、石器が残された際の時間差や生活面については、今後の接合作業や母岩の分布状況などで検討する予定である。

(2) 発見した石器群

石器群は、B区とC区にまたがった状態で検出されたが、両区を合わせた平面分布上では大きく2つのブロックが認められる（図8）。1つは西側に分布する第1ブロックであるが、そのブロックの西側の一部は倒木痕によって欠落している。この欠落がなければ、直径8mほどの円形のブロックであったものと思われる。第2ブロックは、第1ブロックの北東にあり、南西から北東へ傾斜するように分布する。ただし、中心域がやや空間が見られるため、異なる2つのブロック

クが重複しているのか、空白域を有する1つのブロックであるのかについては検討をする。また、前半期の後述する磨製石斧をともなう石器群の例を鑑みれば、環状ブロックの可能性もあり、今回発見の石器ブロックより第1ブロック南西と第2ブロックの東の隣接地にも、同様のブロックが存在する可能性がある。

出土した石器資料は、座標記録したもので第1次：146点、第2次が275点、計421点。現在、整理中であるため、詳細な組成については検討中であるが、洗浄が終了している第1次調査と、第2次調査の現場で確認している限りにおいて、トゥールは珪質頁岩製台形石器：2点、玉髓質頁岩製台形石器：2点、透閃石岩製磨製石斧：1点、透閃石岩製剥片・碎片：3点、珪質頁岩製サイドスクレイパー：1点である（写真29～30）。剥片石器の石材としては、珪質頁岩、玉髓質頁岩、玉髓である。剥片は、矩形剥片が主であるが、石刃状の剥片も見受けられる（写真32）。ただし、石刃状剥片は、石刃として連続的に剥離されたものであるか、あるいは台形石器の素材として单設打面の一方から矩形剥片を剥離する過程で一連に剥離されたものであるのかについては、今後の検討課題である。

今回、とくに注目されるのは、第1・第2ブロックの境界付近から出土した透閃石岩製磨製石斧である（写真19・20・27・28）。本県では、発掘資料として前半期の石斧が出土したこと初めてであり、県内最古の石斧として位置づけられる¹⁾。現場にて明治大学黒耀石研究センターの中村由克氏に鑑定していただいたところ、直線距離で300km以上離れた長野県北西部の白馬八方産の良質なD2タイプの透閃石岩であることが判明した。このD2タイプは、秋田県地蔵田遺跡（秋田市教委2011）出土の完形品であるNo.2154と同種の石材であり、東北地方において2例目となる（図1：透閃石岩製石斧としては、岩手県大台野遺跡〔大台野遺跡研究グループ1975〕と合わせると3例目）。ただし、本遺跡の石斧は、地蔵田のものに比べてリダクションなどが進んでおり、著しく変形している。そのため、同じD2タイプの透閃石岩製磨製石斧が出土した地蔵田遺跡と本遺跡とでは、石斧の運用の仕方が異なっていたことが想定される²⁾。

（3）遺跡の年代

第1次調査で採取した6点の炭化物うち、旧石器時代の年代値が得られたのは下記の4点である（¹⁴C年代の暦年較正には、OxA14.4〔較正曲線データ：IntCal20〕を使用）。

表1 水林下遺跡第1次調査採集炭化物に対するAMS年代測定、および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1σ)	^{14}C 年代を暦年に較正した年代範囲		^{14}C 年代を暦年に較正した年代範囲	
				1σ 暦年較正範囲	2σ 暦年較正範囲	1σ 暦年較正範囲	2σ 暦年較正範囲
PLD-43146 回転 No. 029	-24.78 ± 0.29	30199 ± 105	30200 ± 110	32729-22987 cal	32948-32357 cal	34678-34456 cal	34897-34306 cal
				BC 088,375	BC 085,470	BP 088,175	BP 085,470
PLD-43147 回転 No. 030	-25.97 ± 0.30	30292 ± 105	30290 ± 110	32817-22543 cal	32154-32459 cal	34766-34408 cal	35103-34408 cal
				BC 088,370	BC 085,470	BP 088,170	BP 085,470
PLD-43148 回転 No. 031	-25.79 ± 0.28	24254 ± 71	24250 ± 70	36695-26449 cal	36179-26230 cal	38644-38379 cal	38728-28179 cal
				BC 068,270	BC 065,470	BP 068,270	BP 065,470
PLD-43149 回転 No. 032	-24.23 ± 0.38	29542 ± 102	29540 ± 100	32339-22069 cal	32430-31900 cal	34288-34018 cal	34387-33655 cal
				BC 068,270	BC 065,470	BP 068,270	BP 065,470

暦年較正では、1σで34766-28644cal BP、2σで35103-28179cal BPの年代値が得られ、前半期の年代値として矛盾はない。

第1次調査で実施した火山灰分析では、屈折率の異なる2種類の火山ガラス、AT火山灰、および杉沢アテフラが混在した状態で検出された。

4 今後の課題

本遺跡の立地や鳥海山との関連、ブロックの形成、石器製作技術、石器使用痕、石斧の運用の在り方などの検討課題については、今後の調査、および整理作業において取り組んでいきたい。

註

- 1) 前半期の石器群が出土している村山市清水西遺跡で発見された石斧があるが、発掘資料ではなく、表面採集品である（山理文 2015）。
- 2) なお、地蔵田遺跡の石斧についても、長軸を考慮すれば、使い込まれ、再生を繰り返した可能性も考えられる。

謝 辞（五十音順、敬称略）

石川恵美子 石船清隆・朋子 大川貴弘 鹿又喜隆 神田和彦 金 彦中 佐野勝宏 渋谷孝雄
戸塚瞬翼 中村由克 林信太郎 山口博之

引用・参考文献

- 秋田市教育委員会 2011 『地蔵田遺跡－旧石器時代編－』秋田市教育委員会
大台野遺跡研究グループ 1975 『大台野遺跡』湯田町教育委員会
中野 俊・土谷信之 1992 「鳥海山及び吹浦地域の地質」『地域地質研究報告 5万分の1地質図幅 秋田(6)』46・47pp. 1~10 地質調査所
中村由克 2015 「後期旧石器時代における透閃石岩製石斧のひろがり」『旧石器研究』11 pp.65~78 日本旧石器学会
林信太郎・山本正羅 2008 「鳥海火山」『地質学雑誌』114 pp.87~95 日本地質学会
公益財団法人山形県埋蔵文化財センター 2015 『清水西遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書220
公益財団法人山形県埋蔵文化財センター



図1 透閃石岩産地と透閃石岩製磨製石斧出土遺跡の位置（中村 2015 に加筆）



図2 遺跡位置図

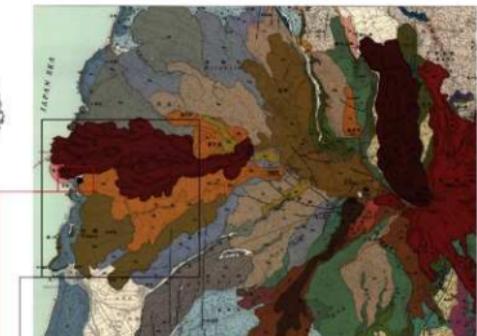


図3 鳥海山西麓地質図
(中野・土谷 1992 に加筆: S=1/200,000)



図4 鳥海山西麓地質図
(中野・土谷 1992 に加筆: S=25,000)



写真1 1947年米軍撮影の鳥海山西麓
俯瞰写真 (S=約1/200,000)

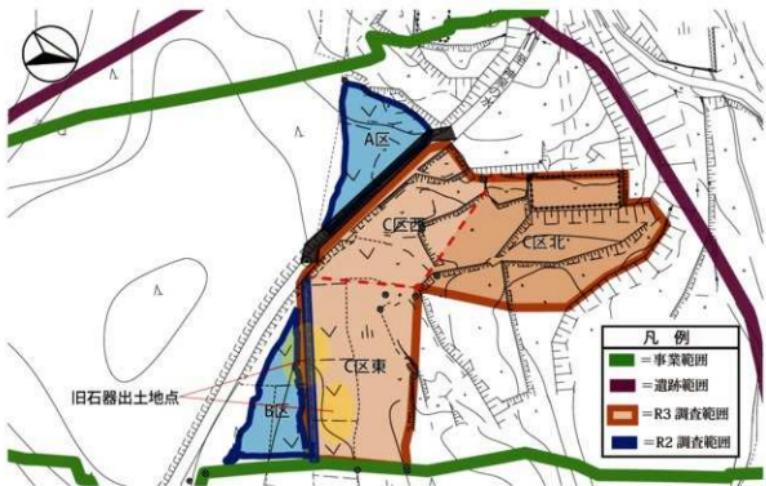


図5 調査概要図と旧石器出土位置 (S=1/1,000)



写真2 遠景写真1（北西から）



写真3 遠景写真2（東から：鳥海山5合目付近より）
※パノラマ合成



写真4 遠景写真3（北西から）
※パノラマ合成



写真5 遠景写真4（北から）



写真6 遠景写真5（西から）



写真7 遠景写真6（南東から）



写真8 第1次調査B区旧石器調査区俯瞰
(上が北)



写真9 基本層序



写真10 第2次調査C区東旧石器調査区
俯瞰 (上が東北東)



写真6 第1次調査B区旧石器調査区オルソ画像
(上が北: S=1/100)

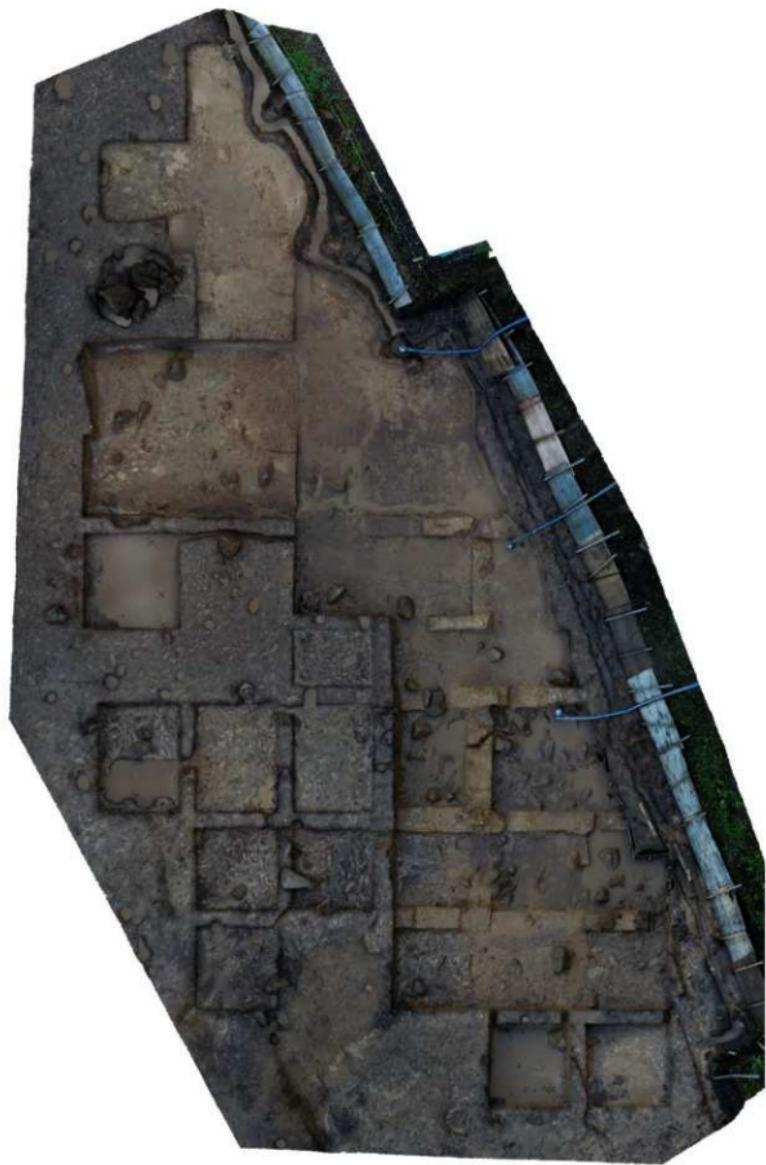


図7 第2次調査C区東旧石器調査区オルソ画像
(左が北: S=1/100)



写真 11 第 1 次調査 RQ7 台形石器
出土状況（東から）



写真 12 第 1 次調査 上：RQ74 台形石器
下：RQ110 出土状況（北東から）



写真 13 第 1 次調査 RQ4 ~ 6 出土状況
(北東から)



写真 14 第 1 次調査 RQ21 ~ 24 · 38 · 40
出土状況（西から）



写真 15 第 1 次調査 RQ92 出土状況
(南から)



写真 16 第 1 次調査 RQ106 ~ 109 · 111 · 112 ·
116 · 118 · 121 ~ 123 出土状況（東から）



写真 17 第 1 次調査 RQ130 ~ 132 · 138 ~
140 · 142 出土状況（西から）



写真 18 第 1 次調査 RQ148 ~ 153
出土状況（南東から）



写真 19 第2次調査 RQ221 透閃石岩製
磨製石斧出土状況（北西から）



写真 20 第2次調査磨製石斧取り上げ後
のインプリント（北西から）



写真 21 第2次調査 RQ337 台形石器
出土状況（北東から）



写真 22 第2次調査 RQ340 台形石器
出土状況（北東から）



写真 23 第2次調査第1ブロック石器
出土状況（西から）



写真 24 第2次調査 RQ169 出土状況
(北から)



写真 25 第2次調査 RQ191 出土状況
(西から)



写真 26 第1次調査 RQ324～325
出土状況（北西から）



写真27 第2次調査RQ353出土状況
(南西から)



写真28 第1次調査RQ377出土状況
(北西から)

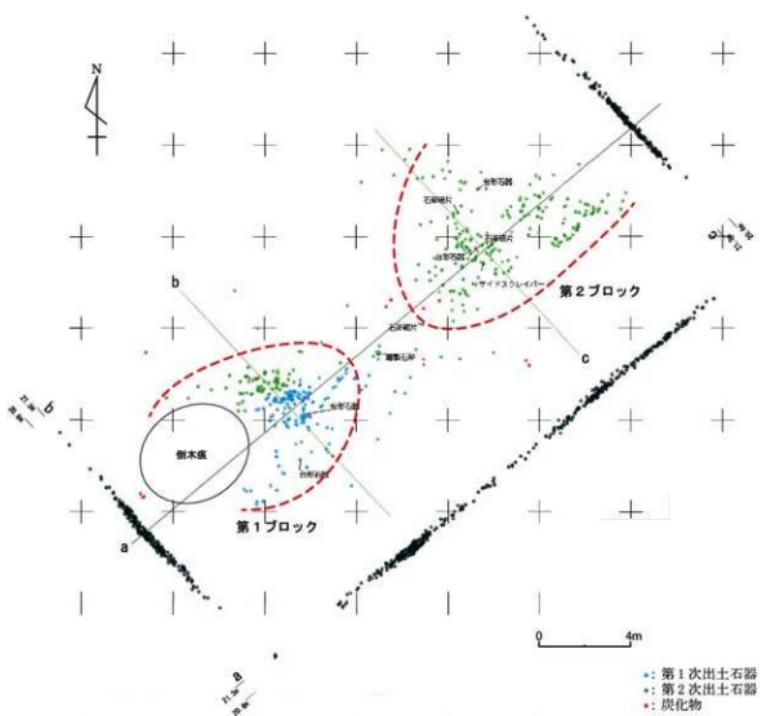


図8 石器分布図



写真 29 透閃石岩製磨製石斧 (S=1/1)



写真 30 透閃石岩剥片
・チップ (S=1/1)



表面



裏面

写真 31 台形石器 (右下・左上: 玉髓製、
右上・左下: 珪質頁岩製、S=1/1)



写真 32 硅質頁岩製石刃状剥片
(S=1/1)



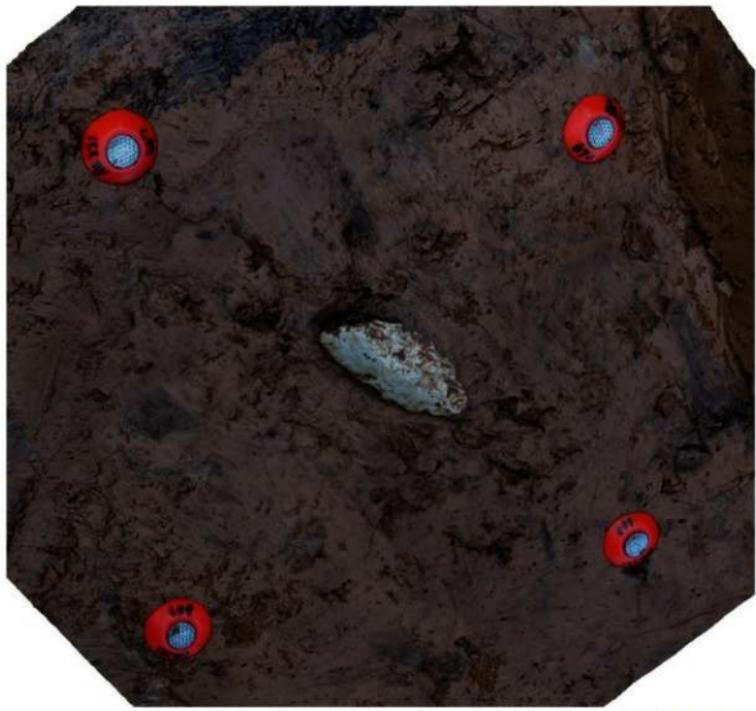
写真 33 玉髓製剥片 ($S=3/4$)



写真 34 左：珪質頁岩製短形剥片石核・右：両極石核 ($S=1/2$)



写真 35 左：玉髓製短形剥片石核・右：珪質頁岩製短形剥片と石核の接合資料 ($S=1/2$)



Generated with Agisoft Metashape

図9 RQ221透閃石岩製磨製石斧の出土状況の三次元画像

笹山原遺跡 No.16 第20次発掘調査

洪惠媛（東北大学）・工藤雄一郎（学習院女子大学）・藤原妃敏・会田容弘（郡山女子大学短期大学部）

発掘調査の概要

- ・ 遺跡名：笹山原遺跡No.16（福島県遺跡番号20200039）
- ・ 所在地：会津若松市湊町大字赤井字笹山原136
- ・ 調査期間：令和3年9月11日（土）～9月21日（火）（11日間）
- ・ 調査面積：約108m²（14m×12m）
- ・ 調査主体：郡山女子大学短期大学部考古学研究室
- ・ 調査担当：会田容弘
- ・ 調査指導：藤原妃敏氏（郡山女子大学短期大学部非常勤講師）
- ・ 技術指導：シン技術コンサル

調査協力：東北大学大学院文学研究科考古学研究室、学習院女子大学国際文化交流学部日本文化学科

はじめに

郡山女子大学短期大学部考古学研究室では2001年から、会津若松市湊町笹山原地区の考古学的調査を行っている。この調査目的は「会津地方の後期旧石器文化の研究—猪苗代湖畔に展開した後期旧石器人の生活—」である。さらに調査は短期大学部専攻科文化学専攻「日本の考古学」「考古学演習」（担当：会田容弘）の授業、短期大学部地域創成学科「考古学実習」（担当：会田容弘・洪惠媛（非常勤講師））の授業として行われ、それぞれの受講学生が参加している。さらに、東北大学大学院文学研究科考古学研究室大学院生、学部学生、学習院女子大学工藤雄一郎准教授、学習院女子大学国際文化交流学部 日本文化学科学生が参加した。

1 発掘調査の経緯（図3-6）

例年笹山原遺跡発掘調査は5月後半に実施してきた。しかしながら、2020年の発掘調査はコロナ禍のために、断念せざるを得なかった。2021年はコロナ感染者の増減がありながらも、郡山女子大学では感染対策を行いながら、対面授業を行ってきた。教育の平等性を担保するために、2021年は例年通り5月に発掘調査実施を目指し、準備を行ってきた。三密を避けながら、合宿型発掘調査実習を維持する方向で調整を行ってきた。しかし、4月になり緊急事態宣言が発令されるなど、コロナ感染者数は増加の一途をたどった。それを受け、関口修学長から発掘調査実施の無期延期が指示された。それにより、5月の発掘実施は立ち消えとなつた。その後、ワクチン接種が開始され、医療従事者や65歳以上の老人が優先的に行われた。その後、職域接種が始まる中で、郡山女子大学はいち早く名乗りを上げ、6月末から教員、学生の接種希望者へのワクチン接種が始まった。若い女子学生には発熱などの副反応が多くみられたが、7割弱の学生が接種を受けた。それを受けて、学長から発掘調査準備を許可されたのは7月後半であった。9月に発掘調査を実施するには、地権者の岩崎さんかにソバ栽培の休耕を願わないわけにはいかなかつた。あるばい

んロッジにも発掘期間中の宿泊をお願いした。郡山女子大学短期大学部学生が最大で30人ほど宿泊をすると三密を回避することは困難である。また、学生も合宿発掘への不安を訴えるものもあり、その対策として、学園バスにより郡山・笛山原遺跡間の往復便を設定することにした。通勤発掘を希望する学生はそれを利用することにした。このように万全のコロナ対策を行ったが、オリパラが実施されたことで、第5波の収束が見えなかつた。9月11日（土）発掘調査開始の準備がすべて終わっていたが、学長が最後の決断（会田の出張許可）を持ち越していた。そして、許可が下りたのは9月9日（木）の教授会後。「気を付けてやれよ。」「酒飲むなよ。」この二言で笛山原遺跡第20次発掘調査が実施されることになった。

今回の調査では、会田がめでたく定年になり、老人の仲間入り（ワクチン接種も65歳以上のファイサー）したことから、考古学実習の発掘調査期間中だけ東北大学助教洪惠媛先生をお迎えし、調査及び学生指導をお願いすることができた。さらに、学習院女子大学工藤雄一郎先生とは女子の高等教育を担う同じ志と、赤井低地の泥炭層分析により笛山原遺跡周辺の先史時代環境の研究をされていることから、学生さんと一緒に発掘調査に参加していただくことができた。女子の考古学教育においては画期的な出会いがあったのである。

第20次発掘は第19次発掘によって課題とされた平安時代の谷状遺構（大きな黒い落ち込み）の全体像を確認することを目的としたために、一部19次調査区に重複した例年よりも大きめの発掘調査区（東西14m、南北12m）を設定した。そのうち東西8m、南北6mが2019年の調査区と重複している。旧石器時代の調査区（4b層まで発掘）は東西8m、南北6m（面積48m²）の区域である。

発掘調査は5月11日（土）から開始したが、平安時代の遺構確認に大変手間取った。結果的に平安時代の堅穴住居1基、掘立柱建物1棟、焼成遺構1基を検出した。堅穴住居の完掘・記録は最終日5月21日（火）にまで及んだ。旧石器時代の遺物が出土する3層に調査の手が届いたのは9月19日（日）になってからである。そして、旧石器遺物が出土したのは20日、4b層を掘り切ったのはこれまた調査最終日21日（火）であった。天候には恵まれたが、台風の接近で9月18日（土）だけ全休とした。調査の経緯詳細については、年度末に刊行される『地域創成学科報告集』第4集に譲る。

2. 基本層序と遺物出土層位

基本層序は前年と同様である。基本層序は以下の通りである。

1層：黒褐色砂質シルト、粘性なし、しまり弱。沼沢バミス粒を少量含む。土師器を少量含む。1層中位で横倒しの長胴甕を確認した。それは4個体の長胴甕が連なる堅穴住居の煙道であった。これまで2a層上面で平安時代の遺構を確認していたが、平安時代生活面は1層中位であることが明らかになった。

2a1層：黒褐色砂質シルト、粘性なし、しまり弱。上面で平安時代の遺構確認。暗褐色シルトをまだらに含む。沼沢バミスを多く含む。

2a2層：黒褐色粘質シルト、粘性やや弱い、しまりやや弱い。直径5~10mmのレキを3%程含む。レキは2a1層由来の沼沢バミスを含む。

2b層：黒褐色砂質シルト、粘性なし、しまり中。

3層：漸移層。2b層に黄褐色粘質シルトと褐色粘質シルトをまだら状に含む。

4a層：明黄褐色砂まじりシルト質粘土。しまり中。凝灰岩礫を極少量含む。石器遺物包含層。下部にAT（姶良丹沢）火山灰を含む。

4 b 層：明黄褐色砂まじりシルト質粘土。しまり中。1~2cm の礫を少量含む。4 a 層よりもやや暗い。石器遺物包含層。

5 層：明黄褐色砂まじりシルト質粘土。しまり中。凝灰岩礫を大量に含む。部分的に黄橙色シルト質粘土を含む。遺物は含まない。

地形は西側に傾斜している。EW25 区南西隅に 1 m四方程度のテストピットを掘ったところ、2 b 層は厚く堆積しているが、3, 4a, 4 b 層が大変薄いことがわかった。西側での旧石器資料の検出が困難かもしれない。

3. 旧石器時代の遺物分布（図 1・2）

本調査区には平安時代の遺構が多く確認できたが、縄文時代の遺物はほとんど出土しなかった。よって、2b 層以下の発掘はひたすら掘り下げ作業のみ続いた。3 層からの遺物もほとんど出土していない。今回は空振りかという悪い予想が頭をよぎっていった。そんな悪夢を吹き飛ばしてくれたのが、東北大学考古学研究室 2 年の楠君であった。楠君は根っからの考古ボーイ（本人は昆蟲少年でもあるらしいが）らしく、しぶとく執念深く発掘を行っていた。それが幸いしたか、多分一番多く石器を掘っている。総点数 20 点ではあるが・・・

石器は発掘区の南側に集中している。次回はここを掘ってくださいと言わんばかりの出土状況である。

4. 旧石器時代の出土遺物（図 7・8）

石器は 20 点出土した。はつきりとした細部調整剥離が認められる石器は 3, 12, 17 で、背面側、腹面側を問わず、不連続な細部調整でノッチが形成されている。6, 7, 8 はノッチ状の刃部を作出した剥片と推定される。4 は磨製石斧の刃部破片である。打面部に明瞭な打点が確認できないことから加撃によって剥離されたものではなく、加圧によって割れた可能性が大きい。とするならば、使用中の刃部破損の際に生じた剥片（所謂刃歿れ剥片）といえる。剥片を観察すると折れ面、微細な剥離痕、肉眼で観察できる光沢が認められる。それらが使用時に生じたものなのか、今後デジタルマイクロスコープなどを用いて十分観察したい。19 は凝灰質頁岩製のサイコロ状の石核である。東壁にあった 21SK01（平安時代の焼成遺構）内から出土した剥片と接合している。

まとめ

2021 年の発掘調査ではわずか 20 点ではあるが旧石器資料が出土した。笹山原遺跡 No.16 の遺物分布（図 1）から見れば、第 2 石器集中と第 3 石器集中のどちらに帰属するものなのか、判断に困る位置である。次年度は南側を調査することで、その広がりを明らかにすることができます。母岩分類、接合作業を行うことで、これまで認められた石器集中との関連が明らかにできよう。動作連鎖の視点で研究を進めることで、笹山原旧石器人の具体的な動作内容を明らかにしてゆきたい。



図1 篠山原遺跡旧石器分布図

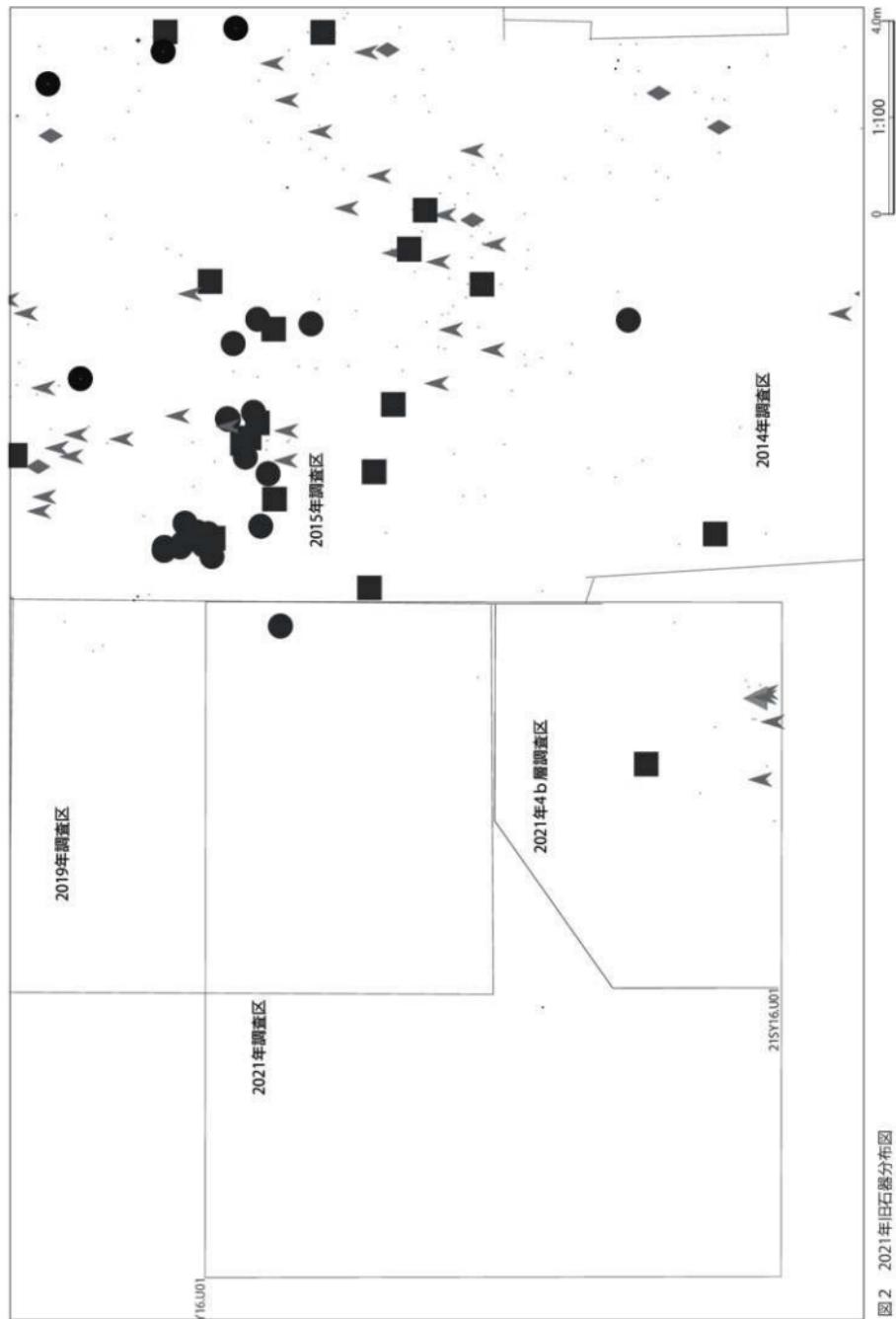


图2 2021年旧石器分布图



図3 笹山原遺跡 No.16 発掘区全景（工藤によるドローン撮影）



図4 笹山原遺跡 No.16 発掘終了状況



図5 笹山原遺跡 No.16 旧石器出土状況



図6 笹山原遺跡 No.16 旧石器出土状況拡大



図7 笹山原遺跡出土旧石器表面



図8 笹山原遺跡出土旧石器裏面

福島県町畑・吉治下遺跡

公益財団法人福島市振興公社
上田優喜

調査要項

遺跡名：町畑・吉治下遺跡

所在地：福島県福島市平石字町畑、吉治下

調査主体：福島市 調査機関：公益財団法人福島市振興公社

調査面積：4,943 m²（1次調査）

5,179 m²（2次調査）

1,980 m²（3次調査）

調査期間：令和元年6月19日～令和2年2月25日（1次調査）

令和2年5月21日～12月2日 （2次調査）

令和3年5月18日～令和4年1月31日（3次調査）

検出遺構：堅穴建物跡21軒、掘立柱建物跡16棟、自然流路跡1条ほか

出土遺物：旧石器64点、縄文石器、土師器、須恵器、中世陶器ほか

1. 遺跡の位置と地形

町畑・吉治下遺跡が所在する福島市は、福島県中通りの北部に位置する。福島盆地の南半を大きく占めており、東側は阿武隈川右岸の阿武隈高地、北側から西側は奥羽脊梁山脈を形成する吾妻山系・山地、南側は市内松川地区などに広がる丘陵地が分布する。

本遺跡は、福島盆地南端、松川丘陵地の北側裾部の後背丘陵斜面より供給された風化生成物（岩屑）からなる緩斜面に立地し、標高は約85mである。周囲の遺跡からは旧石器はみつかっておらず、縄文時代の遺跡も平田川をはさんだ北北西約500mに位置する照内遺跡から縄文土器が採取されたのみである。東北東約2kmの丘陵地には後期旧石器時代の石器製作跡が確認された学塙遺跡群が位置する。

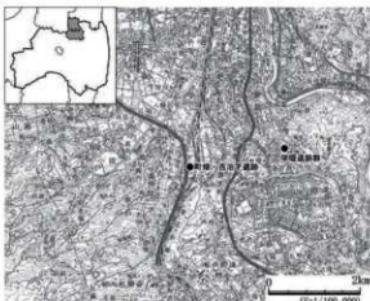


図1 遺跡位置図



図2 町畑・吉治下遺跡周辺図

2. 調査経過

本遺跡は、平成 25 年に道路新設「一般国道 13 号福島西道路事業」に伴う分布調査によって発見され、平成 29・30 年度に試掘調査が実施された。試掘調査の結果、奈良・平安から近世の遺構・遺物が確認されたことから、令和元年度より本調査を実施することとなった。

令和元年度に実施した 1 次調査では、道路工事の工程上 8 区画（A～H 区）に分割して調査を実施した。主に平安時代の遺構・遺物が確認され、時期不明の落とし穴跡や石礎・剝片も確認された。

令和 2 年度に実施した 2 次調査では、（I～L 区）の 4 区画に分割して調査を実施した。時期不明の落とし穴跡、近世の遺構・遺物が出土している。空中写真撮影のため清掃中、風倒木痕より石刃が出土したため、出土地点及び III 層が確認された範囲に 4×4 m の確認トレンチを設定した。調査期間に限りがあったため、随時トレンチを設定して調査を行った。結果的にトレンチ 26 箇所（K 区 8 箇所・L 区 18 箇所）計 385 m² の調査を実施して、64 点の石器が出土した。

本年度（令和 3 年度）の調査では、令和 3 年 11 月末時点での調査結果を記載する。主に奈良・平安時代の遺構・遺物が確認された。石礎・石錐など縄文時代に位置付けられる石器はごく少数出土しているが、旧石器時代に位置付けられる石器は現在のところ出土していない。

3. 基本層序

令和 3 年度時点での 2 次調査の基本層序を記載する。

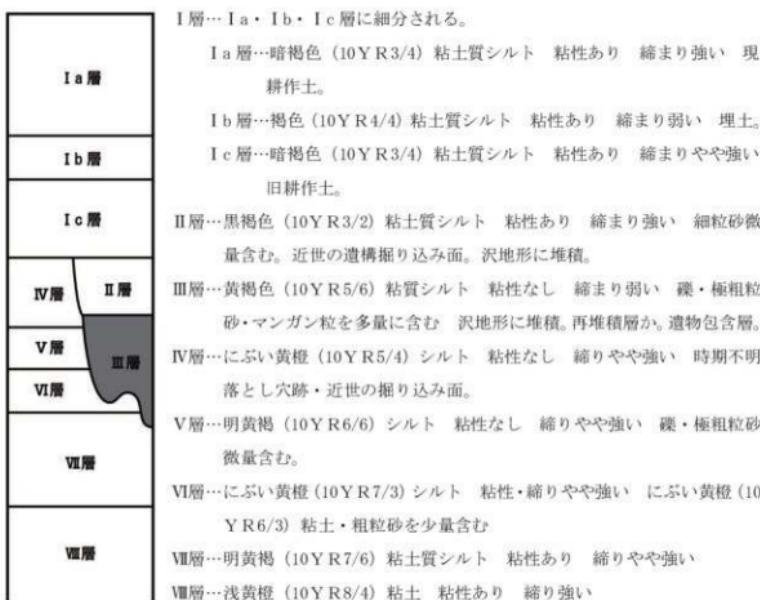


図 3 土層柱状図

4. 調査成果

現在のところ、整理作業中のため出土状況・器種組成は検討中であり、暫定的な報告となる。

2次調査において、沢地形でII・III層の堆積を確認した。II・III・IV層上面から近世の溝跡ほか、遺構から近世陶磁器が出土した。また、遺物が出土していないため詳細な時期は不明だが、落とし穴跡・風倒木痕が確認された。

(1) 石器の出土状況

確認トレンチより出土した遺物はすべて三次元測量による取り上げを行い、Agisoft Metashapeソフトを使用して3Dモデルを作成した。遺物はすべて石器で、土器・炭化物は出土していない。石器のほとんどはIII層中からの出土で、残りはIII層上面で確認された風倒木痕より出土した。

III層は、調査区南東域の丘陵地から北西に向かう沢地形に堆積しており、出土した石器の水平分布は南東から北西方向に延びる分布状況である。垂直分布はIII層中にまんべんなく出土している。石器がまとまって出土したトレンチを中心に土囊5袋分のサンプルを採取し、水洗選別を行ったが微細遺物は出土していない。

(2) 出土した石器

出土した石器は64点である。器種は、現在確認できるものでスクレイパー、石刃、石核、剥片、碎片である。石材は、1点のみ凝灰岩で他はすべて珪質頁岩である。

スクレイパーは3点出土した。3点は背面端部に急角度の二次加工が施されている。写真1-1は、背面両側縁上端部に二次加工があり、1-3は、背面片側縁、腹面片側縁下半部に二次加工が施されている。1-4は、背面両側縁上端部に二次加工が施されており、スクレイパーの上端部と考えられる。剥片・碎片はおよそ1×1cm～4×4cmの大きさのものが出土しており、2～3cm四方の剥片・碎片が多い。

5. おわりに

2次調査における発掘調査の結果、64点の石器が出土した。石器が出土したIII層は、再堆積層であるため、上流部から石器が流されてきた可能性が高い。このことから、上流部である2次調査区外南東域の丘陵地まで遺跡の範囲が広がると考えられる。

現在、本遺跡は3次調査を実施しており、1・2次調査の整理・検討を行っている最中であるため、今後、出土資料の分析も合わせて整理を進めながら検討したい。なお、本遺跡より出土した遺物は福島市が所蔵している。

参考文献

- (財) 法人福島市振興公社編 1995「学塙遺跡群」『福島市埋蔵文化財調査報告書 第67集』福島市教育委員会
- (公財) 福島市振興公社編 2018「平成29年度市内遺跡試掘調査報告書」『福島市埋蔵文化財調査報告書 第234集』福島市教育委員会
- (公財) 福島市振興公社編 2019「平成30年度市内遺跡試掘調査報告書」『福島市埋蔵文化財調査報告書 第235集』福島市教育委員会

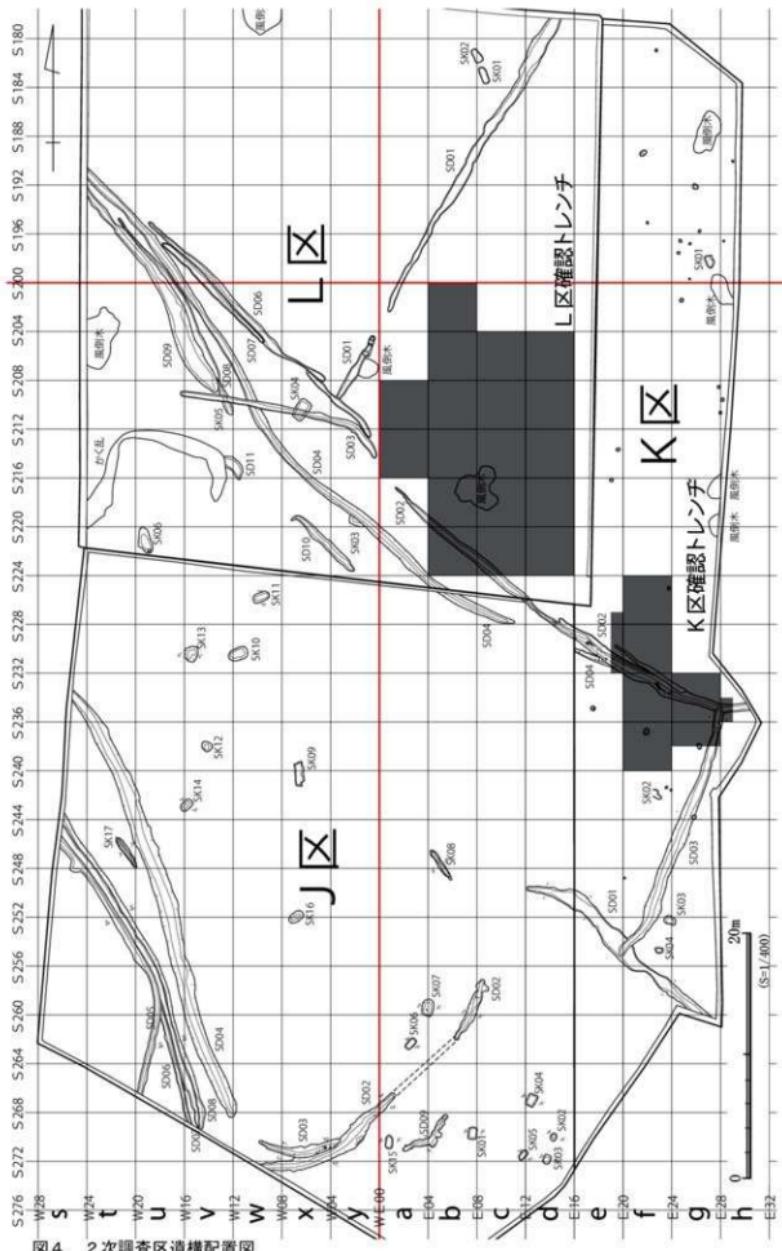


図4 2次調査区造構配置図

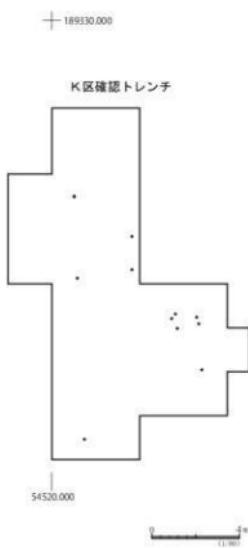
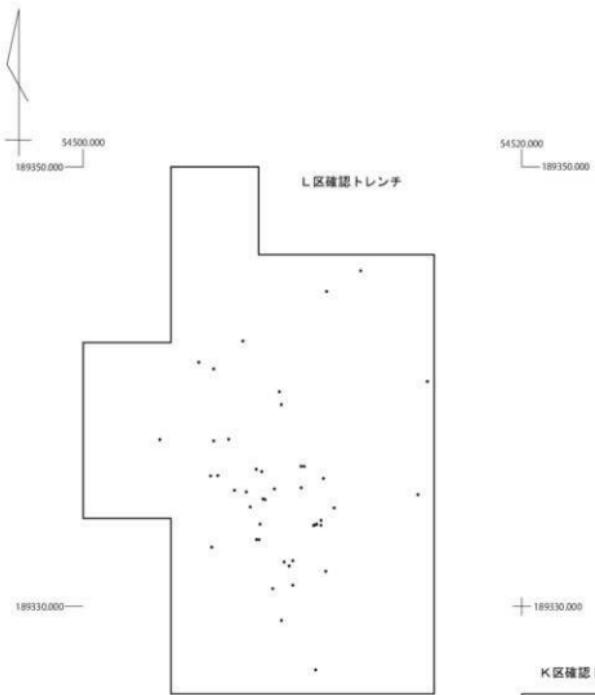


図5 K・L区確認トレンチ出土石器分布図



写真1 出土石器

芦ヶ崎入り遺跡

佐藤 信之

1 調査要項

遺跡名：芦ヶ崎入り遺跡（北緯 $37^{\circ} 00' 08''$ 東経 $138^{\circ} 38' 46''$ ）

所在地：新潟県中魚沼郡津南町大字芦ヶ崎甲 2012-2、甲 2011-2、甲 2016-5

調査原因：石黒川砂防ダム工事

調査期間：2021年6月8日～8月13日

発掘調査面積：205 m²

調査主体：津南町教育委員会

2 遺跡の位置と立地

芦ヶ崎入り遺跡は、新潟県南部、長野県との県境にある津南町の信濃川の右岸、中津川の左岸に位置し、中津川の支流である石黒川の左岸の標高318mの舌状台地の先端の狭い平坦部に位置する。

津南町は、信濃川左岸に隆起した東頸城丘陵があり、地滑り地帯となっている。そして、右岸は、中津川との合流点などで河岸段丘が広がっている。中津川右岸の河岸段丘は、およそ40万年前に離水した谷上面から、およそ1万5000年前に離水した大割野面まで、10段もの河岸段丘が発達する。左岸には、およそ20万年前に離水した米原面が広がり、沖ノ原遺跡などの遺跡が分布する。本地域は、河岸段丘の段丘崖沿いに湧水が点在し、小河川が流れる。そして、米原面の上には、およそ30万年前に噴火した苗場山の溶岩層が堆積しており、溶岩層とその下の層との間に地下水層があり、米原面において、湧水が点在し、そこを端に発した小河川が多く流れている。

本遺跡の脇を流れる石黒川もその1つである。これらの小河川に挟まれた舌状台地の先端の狭い平坦部に本遺跡が立地する（図1・2）。

3 調査の目的と経緯

津南町においては、旧石器時代、縄文時代の遺跡が多く点在する。特に信濃川右岸の段丘上に多く分布し、津南町の遺跡390か所のうち縄文時代の遺跡が232遺跡と半数を占める。旧石器時代の遺跡は、縄文時代の遺跡と重なる遺跡が多く本遺跡を含めて74か所が確認されている。

その中には、学史的に著名な神山遺跡、貝坂遺跡、橋ノ木平遺跡がある。また、平成以降の圃場整備に伴う発掘調査によって始良火山灰層の下位の層から石器が出土した正面ヶ原D遺跡や瀬戸内系石器群の加用中条A遺跡、遺跡間接合した下モ原I遺跡、居尻A遺跡、尖頭器石器群の道下遺跡、細石刃石器群の正面中島遺跡、上原E遺跡と多くの旧石器時代の遺跡がある。

本遺跡は、石黒川の砂防ダム工事に伴って実施した。当初、現況は杉林の小山と認識していたが、伐採撤去が行われた結果、わずかな平坦面が確認され、協議の結果、試掘調査を実施した。

試掘調査は、任意にグリッドを設定し、2m×2mを基本として調査区を設定して行った。その結果、縄文時代早期の土器および石器が出土したことから、「芦ヶ崎入り遺跡」として、本調査に移行した。調査方法は、期間、予算が限られていることから、遺物が出土した調査区を拡げて調査を進め、遺物が確認されるとさらに調査区を拡げるという方法で行った。

4. 遺跡の基本層序

基本層序は調査区南側壁面、おおよそ 2m 幅の場所に 1m50cm 程の深堀りを行った(図3)。I 層から VI 層まで確認したが、杉の伐採や伐根による攪乱や、整地のための盛り土も行われていた。III 層はローム層、IV' 層からは、粘土が混じる。V 層には砂や小礫が混じり、VI 層は粘土層だが、褐色土が混じる。出土遺物は I 層からも確認されている。遺物は、II～V 層から主に出土した。II～IV 層から縄文時代早期の山形押型文、条痕文、絡状体圧痕文土器が出土した。石器も同様であるが、IV 層～V 層は、旧石器時代の石器が出土する。VI 層からは、遺物の出土は確認されなかった。

5. 発掘調査の概要

本遺跡において、遺構は確認されなかった。出土遺物は現在整理中であるが、縄文土器 435 点、石器 505 点が出土し、礫や炭化物も含めるとおおよそ 1,000 点ほどとなる見込みである(図4)。出土分布の傾向は、調査区全体に遺物が出土するものの土器は、3か所に傾向がある。土器は、復元できる可能性があるものもある。

石器は、縄文時代の石器と考えられる石鏃(1点)、磨石類(1点)のほか、旧石器時代の石器と考えられる尖頭器(4点)、ナイフ形石器(6点)、彫器(4点)、搔器(1点)、削器(3点)、R F(3点)、U F(3点)、石核(11点)、剥片(459点)などが出土した。

使用石材は、無斑晶ガラス質安山岩、頁岩、チャート、黒曜石、凝灰岩である。主に頁岩、無斑晶ガラス質安山岩を主体とする。

石器の出土分布は、2つの石器出土集中区が確認された。北側は、頁岩を主体として無斑晶ガラス質安山岩、黒曜石が分布するのに対して、南側は頁岩が主体となる傾向がある。

本稿では、出土した石器の一部を紹介する(図5・6)。

1～5は、頁岩製のナイフ形石器である(図1～5)。1は、石刃素材打面を基部に置き、打面が除去されている。先端は欠損している。右側縁にプランディングを行われているナイフ形石器である。2は、石刃素材の打面を基部に置き、打面が除去され、基軸と素材軸 8°ずれ左側縁部基部と、右側縁中央部から上部にプランディングを行われている二側縁加工のナイフ形石器である。3は、素材先端が基部とし、打面が上部で先端は欠損している。背面を見ると石核を 90° 転回して素材剥離が行われている。ものの基部加工が施される。4は、石刃素材の斜断ナイフ形石器である。基部の打面が残り、素材の幅が広く、刃部は素材軸に対して 50° の角度を持つ。5は、幅広の石刃を素材として、打面が除去され、右側縁に肩を持つ加工が施される。6～9は、頁岩製の彫器である。これもナイフ形石器同様頁岩製の石刃を素材としている。6は、幅の広い石刃を素材として、打面を上部とし除去し彫刀面が剥片の腹面から施され、彫刀面の背面から腹面へ剥離が施され、彫刀面の傾斜角は 82° である。7は、幅の広い石刃を素材として、打面を上部とし除去し、基部調整が施され、打面側に背面から腹面にプランディングを施す。彫刀面の傾斜角は 72° である。8は、幅広の剥片を素材として、打面を除去して、右側縁に上下プランディングが施される。彫刀面の傾斜角は 76° である。9は、素材は上下から剥離が施された湾曲した剥片で打面を除去して刃部を作出している。彫刀面の傾斜角は 83° である。10は、無斑晶ガラス質安山岩製の尖頭器である。横長剥片を素材とし両面加工がされ、細部調整が右側面に裏面から施される。また、断面形状は、階段状を呈する。11は、黒曜石製の尖頭器である。打面を上に置き縱長剥片を素材として、素材軸は並行であり、上下、両側縁から押圧剥離による剥離が施される。樋状剥離が確認されることから、1～10 と伴うか、出土状況も踏まえて今後検討が必要である。

6. 発掘調査の成果

当初、縄文時代早期の遺跡と想定されたが、その下の層から旧石器時代の資料が出土した。その広がりの調査を進めると、頁岩を主体とした石器が出土する集中区を確認した。1, 2は、集中区から離れるものの、5や9と同様の北側の石器出土集中区に近い。また、南側の石器出土集中区は、4, 7, 6, 3, 8などが出土する。これらの石材ごとの分布は前述の通りであるが、肉眼観察による頁岩は類似する。関東地域では普遍的に見られるという二側縁加工の石器や上下からの加工される彫器の存在や湾曲した素材を利用している点も注目され、今後の課題である。石器の主な石材についても検討が必要である。本遺跡で出土する石器石材は白・灰色の縞が入る特徴がある。また、チャートについては、遺跡内の小礫層にも存在しており、本遺跡での石器製作についても検討が必要である。本地域では、周辺の石材環境が行われてきた。頁岩は、清津川流域で確認される。11は石器集中区から離れたところからの出土で、これらとの関係は今後の課題である。

7. わわりに

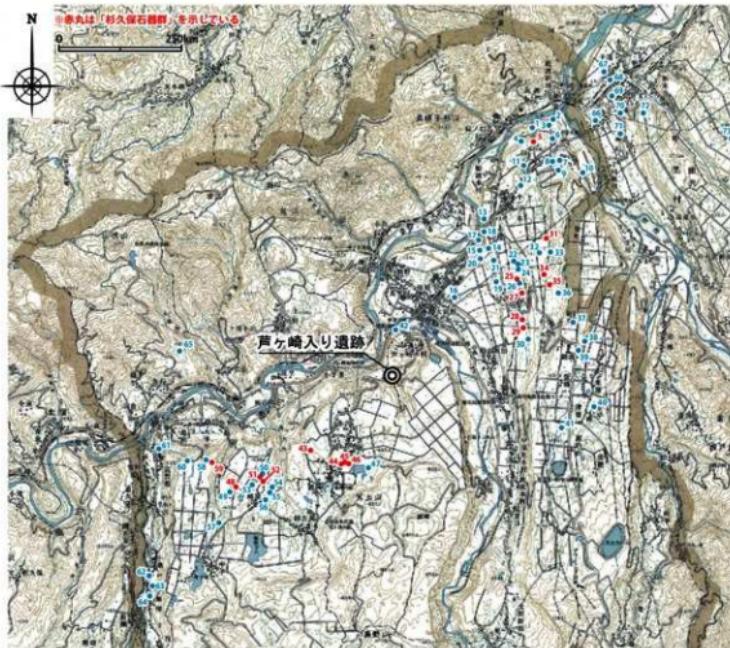
本遺跡からは、頁岩を主体とした石器が出土した。その石器群は、二側縁加工のナイフ形石器と神山型彫器を保有する石器群であり、尖頭器も共に出土した。彫器の橢状剥離のための調整打面が背面、腹面の両方向からの調整で施される稀な資料が含まれる。また、ナイフ形石器と尖頭器が出土した新井遺跡、道下遺跡との比較検討が必要である。これら、上下方向の調整は、関東地方に分布する砂川期のナイフ形石器の側面調整で認められる手法であり注目される。このことから、ナイフ形石器群終末期～尖頭器石器群出現期の遺跡と考えられるが、現在整理中であり、今後、接合作業など整理作業を進め、本遺跡の石器製作技術、石材の獲得、利用、石器群の編年的位置づけを明らかにしていきたい。そして、本遺跡のような小規模な活動痕跡が開発によって確認されたことから、今後もまた精緻な試掘調査を展開し、遺跡の把握周知に努めていきたい。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、東北日本の旧石器文化を語る会事務局および世話人の皆様には大変お世話になり、また、このような機会を与えていただき、感謝申し上げます。また、津南町教育委員会の佐藤雅一氏、林幸大氏、尾池みどり氏および山崎芳春氏より調査から図版作成、遺物の性格、位置付けについてご指導、ご教示、ご協力をいただいた。記して御礼申し上げます。

引用文献

- 芹沢長介・中村一明・麻生 優 1959『神山 新潟県中魚沼郡津南町神山遺跡調査報告』 津南町教育委員会
中村孝三郎・小林達雄 1959『新潟県中魚沼郡津南町貝坂遺跡』『上代文化』第29輯 1-12頁 國學院大學考古学会
佐藤雅一ほか2000 『下モ原I遺跡』津南町文化財調査報告書 第32輯 津南町教育委員会
佐藤雅一・古谷雅彦・中村真理 2001『正面ヶ原ID遺跡』津南町文化財調査報告書 第34輯 津南町教育委員会
佐野勝宏 2002『正面中島遺跡』 津南町文化財調査報告 第50輯 津南町教育委員会
佐藤雅一ほか 2018『上原E遺跡』 津南町文化財調査報告 第74輯 津南町教育委員会
笠井洋祐ほか 2019『第5節技術と石材 4魚沼』『新潟県の考古学III』42-44頁新潟県考古学会
佐藤雅一ほか 2019『第3項 魚沼・刈羽・頭城 1 津南段丘』『新潟県の考古学III』16-25頁新潟県考古学会編
佐藤雅一ほか 2021『道下遺跡』 津南町文化財調査報告 第79輯 津南町教育委員会
佐藤雅一ほか 2021『新井遺跡』 津南町文化財調査報告 第78輯 津南町教育委員会



No	遺跡名	No	遺跡名
1	木ノ木	38	米 廟
2	別所曲	39	越 游
3	別所D	40	豊 平
4	豊ノ木平A	41	東内山
5	豊ノ木平	42	芦ヶ崎西平
6	豊園敷	43	鏡 叉
7	越原A	44	向原B
8	越原B	45	向原B
9	御ノ木平	46	向原C
10	家の上	47	馬井池
11	虎 入	48	上原B
12	前 煙	49	上原E
13	足 板	50	三ツ又
14	道庆手	51	南池A
15	正面A・B	52	南池B
16	正面B・黒B	53	かじか沢A
17	正面D・原D	54	深沢A
18	正面中島	55	深沢 B
19	寺田上A	56	城 原
20	壹 沢	57	前 手
21	土 下	58	勝徳原A
22	貴船原A・木平	59	勝徳原B
23	貴船原A・木平	60	洗崎A
24	貴船原(木平)	61	すづね
25	貴原A	62	天吹寺
26	屋成B	63	加用中条C
27	堂/裏	64	加用中条A
28	堤/脇	65	荒沢C
29	堤/上	66	中 段
30	豪振川東	67	干渓
31	神 山	68	上原敷
32	中ノルネⅢ	69	金所野A
33	小駄平	70	板ノ上
34	下毛原 I	71	通り山
35	良 板	72	一里塚
36	貝塚スゲ田	73	屋根の下
37	大原北		



図1 芦ヶ崎入り遺跡位置図および遺跡分布図



図2 芦ヶ崎入り遺跡位置図

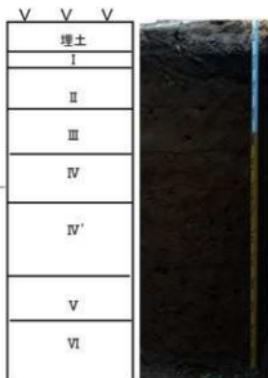


図3 芦ヶ崎入り遺跡基本土層模式図

埋土	表土
I	暗褐色土～褐色土
II	褐色土層
III	褐色土層 黒色土が混じる
IV	褐色土層 IV層よりしまり、粘土が混じる
IV'	褐色土層 川砂・小礫が混じる
V	灰色粘土層 褐色土、川砂、礫が混じる
VI	

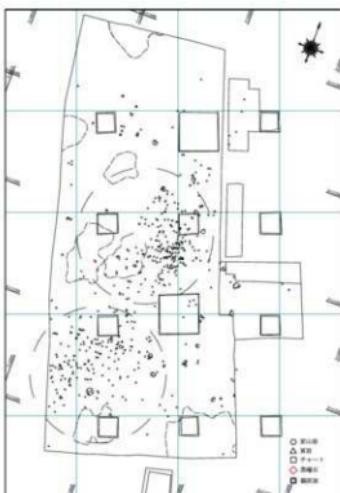
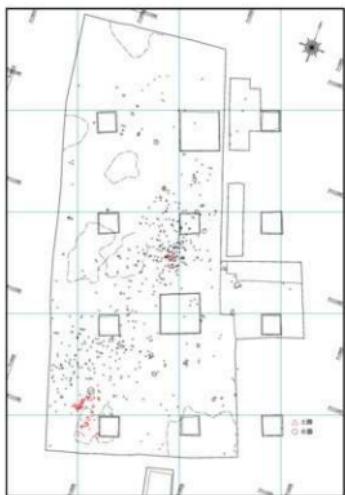


図4 芦ヶ崎入り遺跡出土遺物・石器石材別分布図 (S=1/250)

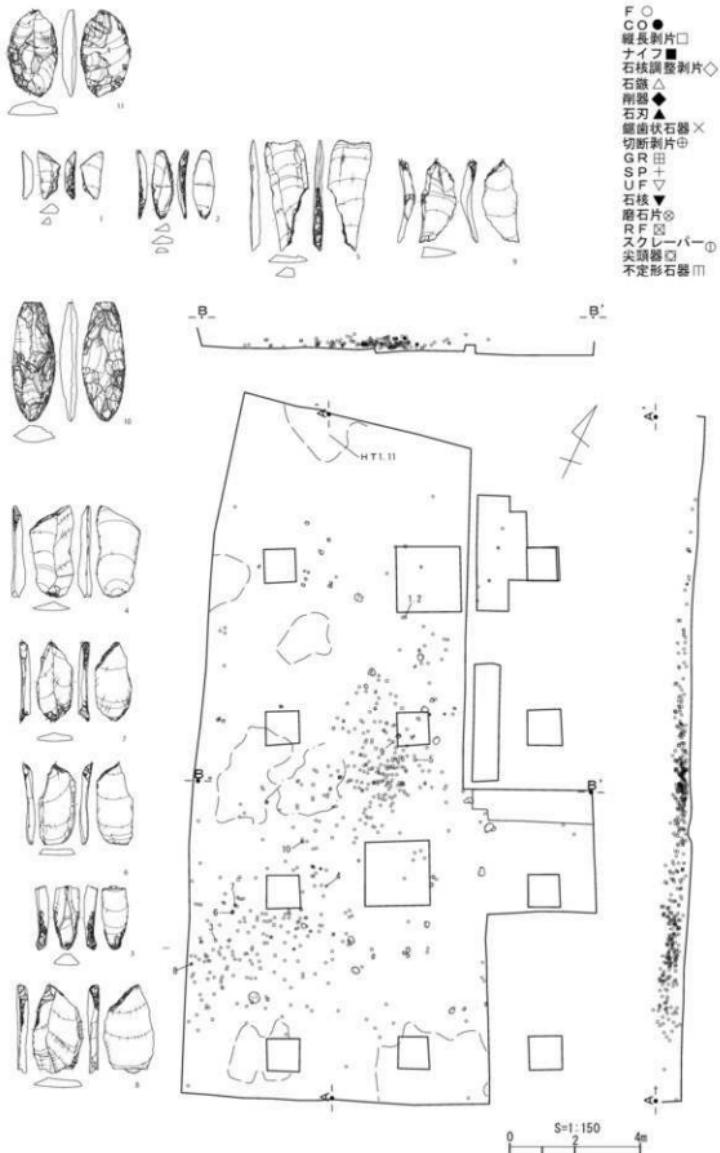


図5 芦ヶ崎入り遺跡出土石器分布図

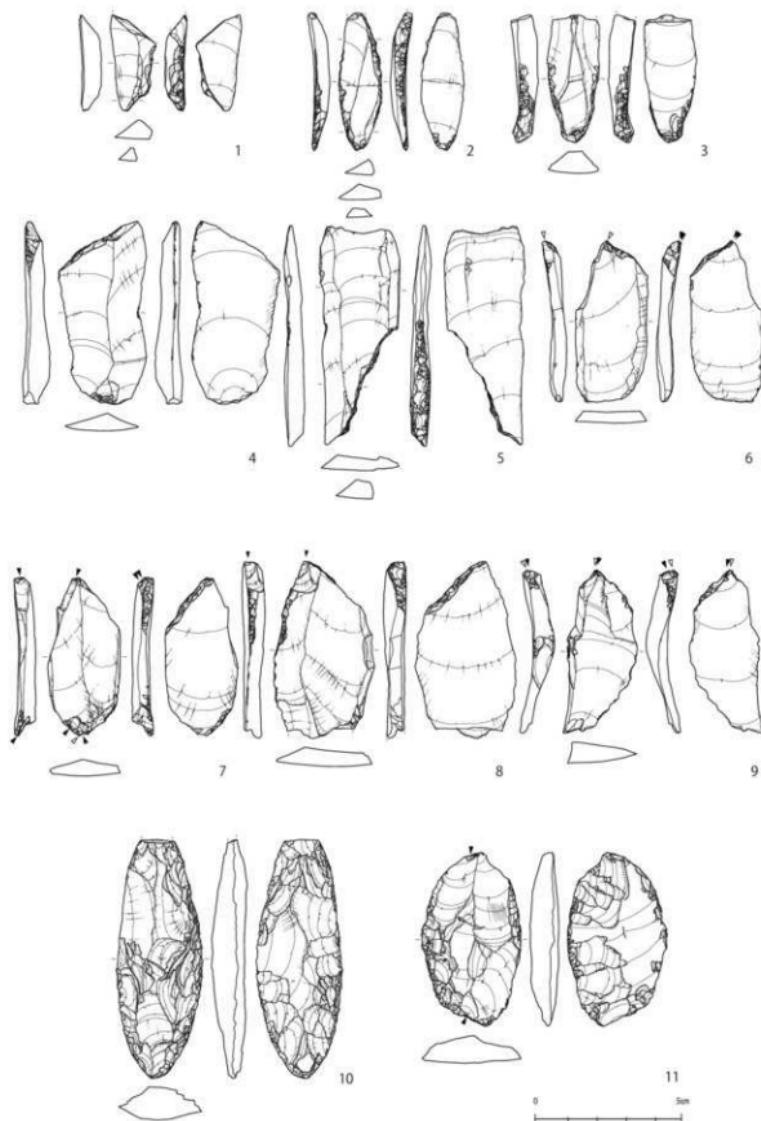


図6 芦ヶ崎入り遣跡出土遺物実測図

北海道常呂郡置戸町田付遺跡出土の石器について

中沢祐一・矢原史希

1 はじめに

置戸町が所在する北海道北東部の常呂川上流域には、黒曜石を用いた石器が多数散布する開地遺跡が知られている。昭和31・32(1956・57)年に、北海道大学医学部解剖学教室第二講座の大場利夫博士らによって集約的に調査された田付遺跡もそうした遺跡のひとつである(図1)。田付遺跡は調査成果がほとんど公表されず、学界からも忘却された(中沢2020)。筆者らは当該遺跡から回収された資料の整理を実施し、2021年3月にカタログ(報告書)を刊行した(中沢・伊藤編2021)。ただし、印刷部数が限られるため成果を広く発信できていない。その点を鑑み、本発表ではカタログで報告した田付遺跡と出土石器の概要について報告する。

2 田付遺跡について

田付遺跡は、常呂川上流の左岸段丘上に位置する。段丘は南を常呂川、東を墓地の沢川によつて開析されている。常呂川が現在流れる沖積面との比高差は約30mである(図1)。遺跡は現在畠地となっており、調査当時も後藤政雄氏が所有する畠として開墾されていた。北海道大学医学部解剖学教室第二講座が更新世人類の調査という目的から、同じ常呂川左岸段丘に位置する安住遺跡、中里遺跡と併行し、昭和31・32(1956・57)年に学術発掘調査を実施した。その際に回収された資料は現在、北海道大学大学院医学研究院(人類進化学教室)にて保管管理している。中里遺跡と田付遺跡についてはそれぞれカタログを刊行し、調査経緯や遺物の内容を公表した(中沢・矢原編2017、中沢・伊藤編前掲)。調査経緯は昨年の予稿集(中沢2020)にも詳しい。今回紹介する田付遺跡出土の石器は3799点確認されている(中沢・伊藤前掲)。

3 遺跡の広がりと基本層序

現在田付遺跡と呼ばれている土地は、台地の一角を占める畠地と牧草地である。遺跡の範囲(図2の点線)は北海道教育委員会が実施した遺跡踏査によって引かれた境界線であり、1970年代の状況を反映する(中沢・伊藤前掲)。その時点で、昭和31・32(1956・57)年になされた北海道大学医学部解剖学教室第二講座の発掘成果については経緯を含めて内容が公表されていなかったため、70年代に指定され今日まで引き継がれている遺跡の範囲は、北海道大学医学部解剖学教室第二講座の学術発掘調査によって確認された所見や遺物は考慮されていない。すなわち、現在田付遺跡として指定されている範囲は第一義的には1970年代の地表面で遺物が散布していた範囲であり、昭和31・32年に調査された時点での遺物の広がりと同じであるとは限らない。むしろ、発掘調査されたトレンチが最大100-140m離れて設定されていることから、現在田付遺跡とされている土地には居住活動の空間的な変異による遺物の粗密が存在すると考えられる。

昭和31・32(1956・57)年に大場博士らが実施した発掘調査は、4つのトレンチから成り、A~地点と呼称された。残されていた遺跡の平面実測図にトレンチの位置が記載されている。実測図におけるトレンチの配置、トレンチ周辺のランドマーク(家屋、道路など)、当時の航空写真の対比、および2020年に実施した現地踏査によって、トレンチのおおよその位置を推定した(図

2、中沢・伊藤編前掲）。一方で、トレンチの形状・大きさは調査者である大場利夫博士が残した原稿に書かれた内容と調査写真に写る該当するトレンチの大きさが一致しない点が見受けられる（中沢・伊藤編前掲）。現在の田付遺跡は発掘調査当時よりも開墾されているものの、都市部のように道路や宅地建設などの大規模な造成を受けておらず地表面が目視可能である。改めて現地にて当時のトレンチの正確な位置を確かめることが課題である。

大場博士が記載した基本層序は4層に分層され、以下である（中沢・伊藤編前掲）。

第1層：黒色土層。30–45 cmの厚さ。

第2層：褐色土層。10–15 cmの厚さ。

第3層：火山灰質粘土層。10–15 cmの厚さ。

第4層：粘土層。層厚不明。

第1層の黒色土層は多くが耕作土と考えられる。調査当時（昭和30年代初頭）の馬耕による耕作深度もおよそ第1層の厚さと大きな隔たりはないと思われる。第2層はいわゆるローム層と考えられる。大部分の遺物は第2層から出土している。第3層の火山灰についてはいかなる性質であるのか、どこから起源したのかは不明である。調査時にD地点・第3層から回収された軽石と炭化物が残されている。この軽石については、共栄3遺跡の調査（中沢ほか2019）を参考とすると、大雪御鉢平軽石、支笏降下軽石、屈斜路火碎流堆積物などの関連が考えられる。トレンチとその周辺は現在広く耕作されてしまっているが、遺跡近傍の露頭などで堆積物のサンプリングを実施し、遺跡の層序との関連を考察する必要がある。

4 田付遺跡出土の石器

A～D地点のトレンチが設定され、発掘調査された結果、多数の石器が回収されている。整理作業では、個別の石器が由来するトレンチを明らかにすことができた。その結果、地点間の石器の点数が明らかとなった（表1）。絶対数でみればB地点が1600点と最も多い。A地点とD地点が900–1000点程度であり、C地点はわずか158点である。ただし上述したように、トレンチのサイズについて、大場博士の記載と整理作業時に実施した写真的目視判定の間に齟齬があり、地点ごとの正確なトレンチのサイズを推定できていない。そのため地点ごとの遺物量の違いは遺物密度を必ずしも反映する訳ではない点に注意しなければならない。

地点ごとの石器組成を示す（表2）。後期旧石器時代の指標となる細石刃製作関連の石器は50点未満と限られている。特に細石刃は少ない。箋を用いるような調査でなかったことによるサンプリングエラー、調査当時は北海道で「細石器文化」が確認されていなかった段階であったこと（中沢2020）、田付遺跡で確認される広郷型細石刃核も当時は彫刻刀形石器という分類単位であったため、細石刃（細石器）に関わる遺跡であることが積極的に認定できなかつたことがその背景にあるだろう。加工具の卓越は北海道の後期旧石器時代を特徴付けるが、田付遺跡では搔器が少なく、削器とノッチが数百点と卓越する。石刃、石刃核が多数あり、ノッチなどの加工具も石刃を素材とするものが多い。石刃は正面から見ると打面部から側縁にかけてすぼまり、頭部調整や打面調整が顕著である。打面部を擦った痕跡がしばしばみられ、頭部調整の一種ととえられる。こうした石刃の特徴は広郷型細石刃核を伴う石器群などによく観察されることから（直江ほか2016）、後期旧石器時代後半の石器群と田付遺跡から出土した石器の関連性が示唆される。

ただし、これらの特徴は発掘された田付遺跡がひとつの石器群からなると考えた場合の見解である。田付遺跡の認定が昭和31・32年の発掘調査成果と関係なく地表面の遺物分布状態から括

られたことや、昭和 31・32 年の調査地点が長軸百メートル以上の広域にわたることから、田付遺跡として括られる範囲には、時期を遡てなされた多数の居住活動が重複している可能性が考えられる。以下はカタログ（中沢・伊藤編前掲）へ掲載した内容の抄録である。

（1）A 地点

大型の石刃核、そうした石刃核から剥離された大型の石刃、小型の石刃を剥離した石刃核（図 3-1）が目立つ。剥片石器は、様々な大きさの石刃や剥片を素材としたノッチや、石刃を素材とした彫刻刀形石器が一定量ある。特異な石器としては、石刃へ両面調整を施した削器（図 3-2）がある。広郷型細石刃核の破片、細石刃、両面調整石器もみられる。礫石器では、片面が広く研磨された斧形石器がある（図 3-3）。表面が風化した安山岩製のストーンリタッチャー（図 3-5）も認められる。長軸方向に顕著な研磨痕を有する、断面が梢円となる石製品が 1 点出土している（図 3-4）。両端が欠損しているため全体の形状は不明だが、欠損して尖った片側の端部に研磨した痕跡があることから、欠損後も何らかの作業に用いられたか、使用目的のために意図的に端部を打ち欠いた可能性も考えられる。厚さは全面にわたり約 15 mm と均質であり、幅は研磨された欠損部側へかけてやや狭まる。全面に酸化鉄らしき赤褐色付着物があり、一部に石英を含む堆積物が沈着する。

（2）B 地点

50 点もの石核が出土している。それらは角礫や亜角礫を素材とする小型の石刃核や剥片石核である。細石刃核は既存の型式分類枠に当てはまらないものが認められる。具体的には、寸詰まりの剥片を素材とし、その厚手の打面から側縁へ細石刃を数本剥離した細石刃核（図 4-1）と、幅広剥片の末端部を稜状に調整し、素材剥片の側面へ向けて細石刃を剥離した細石刃核（図 4-2）が該当する。一方で、湧別技法の工程で作出される削片（スキー状スパール）がある（図 4-3）。

様々な大きさの黒曜石の角礫が多用されており、剥片を剥離した石核（剥片石核）を中心としつつも、石刃核や両面調整石器の素材として広く用いられている。角礫・亜角礫から両面調整石器を作成している途上の石器もある（図 4-4, 5）。剥片石核は、稜状の自然面を打面として剥離したもの、厚手の剥片の主剥離面や打面で剥片剥離を進めたもの、分割面を打面とするものなど様々である。剥離に先立つ打面調整はなされない傾向にある。剥離痕からわかる剥片はしばしば横長で末端がヒンジフラクチャーとなる。用いられた角礫は漆黒で良質の黒曜石が多く、岩層面の特徴からも特定の産出地から採取されたことがうかがえる。

石刃核の中には、背面が礫面もしくは少數の剥離によって調整し、その短軸に打面を設定し、正面の作業面に対して一方向に石刃を剥離した石核がある（図 4-6, 7）。打面を作出した剥離痕の打点側が残されていないことからも、剥片剥離作業面の幅に比して石核の厚さが薄くなる石核は、角柱に近い状態から石刃剥離が進行した段階で放棄されたことがうかがえる。これらの石刃核の剥離作業面の長さは概ね 10 cm であり、最長のものでも 15 cm 未満である。稜付石刃があることから、石刃剥離の初期段階の作業もなされたことが推測できる。こうした形態の石刃核とは別に、より小型の石刃が剥離されている石核もある。大型の剥片や、大きめの剥片が剥離された石核もあり、厚手の剥片が供給されたことがうかがえる。石刃が一定量あるが、二次加工が施された石刃は少ない。石刃や剥片の打面と背面が接する部位が擦られることが少なくない。打面は調整打面が多く、擦りに先行して打面調整がなされた石刃もある。そのほか、縄文時代に属すると思われる石鐵（2 点）が発掘によって第 3 層から出土している。

(3) C 地点

収集された遺物は 158 点のみである。大型から小型までの多数の石刃がある。彫刻刀形石器は石刃素材で、側刃型である。頁岩製の彫刻刀形石器も 1 点ある（図 5-1）。細石刃関連の遺物は少なく、細石刃が 2 点のみで、細石刃核はない。細石刃も広郷型から剥離された特徴をもつ稜・側縁とともに直線かつ平行した細石刃はない。類似する細石刃としては、両端の折れた細石刃（図 5-2）が該当するが、4 mm と分厚く、両側面に微細な剥離痕があり、左側縁には摩耗がみられる点で特異である。異質な石器として、石刃を素材とする両面調整石器がある（図 5-3）。腹面は全面が両面調整され、背面は半分だけ調整が及ぶ。素材と調整方法からみると A 地点の削器（図 3-2）と類似するが、接合関係ではない。

(4) D 地点

石刃、細石刃がほぼ偏りなく収集されている。二次加工された石器の比率も高く、ノッチ、彫刻刀形石器、両面調整石器、搔器などが確認できる。様々な大きさの石刃を素材とした広郷型細石刃核がある。例えば、下半部を大きく欠損した小型の広郷型細石刃核（図 5-4）、厚手の石刃の主剥離面に無数の擦痕が残る被熟した広郷型細石刃核（図 5-5）がある。両面調整石器は 7 点確認され、B 地点に次いで多い。両面調整石器は製作初期の加工途次のもの（図 5-6）や、完形品（図 5-7）まで様々である。D 地点から収集された石器には他の地点と比べると、表面に褐色や赤褐色の付着物のある石器が多くみられる点が特徴的である。

5 まとめと課題

田付遺跡は石刃が豊富なのが大きな特徴だが、石刃石器群あるいは広郷型細石刃石器群といった石器群として一括することは適切ではないだろう。石器の特徴に関する共通性から、A 地点と D 地点は広郷型細石刃核に関連する石器群に帰属する仮説が提示される。対して、B 地点は石刃よりも剥片が主となり、両面調整技術が多用されている点で A・D 地点と異なる。C 地点は点数が少なく他の地点との関連度を推量することが困難だが、A 地点に隣接することから A 地点と C 地点は活動面の関連性も強かったことが予想される。

剥片石器のほとんどが黒曜石を用いている点は共通するが、トレンチ間にみられる遺物量、組成、形態に関する違いは、サンプルサイズ効果、原石の選択、剥離された石刃の比率、石刃技法や両面調整技術など用いられた剥離技術、石器の機能・用途、居住頻度などの変異によって説明できる可能性がある。今後、こうした活動の組み合わせの観点から地點間の活動の関連を明らかにすることによって、田付遺跡の形成に関わる居住活動の重複度を評価したい。

引用文献

- 直江康雄・鈴木宏行・坂本尚史 2016 「白滝遺跡群の石刃技法」『縄文期の人類社会』（佐藤宏之・山田 哲・出神雅実編）、pp. 209–234
- 中沢祐一 2020 「忘れられた置戸遺跡群」『第 34 回 東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』、pp. 36–45
- 中沢祐一・伊藤麻由（編） 2021 『北海道大学所蔵 田付遺跡（置戸町）収集考古資料』、北海道大学大学院医学研究院人類進化教室
- 中沢祐一・長沼正樹・青木要祐・赤井文人・高倉 純・山田 哲・中村雄紀・早田 勉 2019 「北海道常呂郡置戸町・共

采3 遺跡の調査』『第33回 東北日本の旧石器文化を語る会 予稿集』、pp. 59–62

中沢祐一・矢原史希（編） 2017『北海道大学所蔵 中里遺跡（置戸町）収集考古資料』、北海道大学大学院医学研究院
人類進化教室



図1 田付遺跡、中里遺跡、安住遺跡の位置と立地する常呂川左岸の断面投影図



図2 田付遺跡の現況。破線の遺跡範囲とA~Dのトレンチ調査地点

	A地点	B地点	C地点	D地点	地点不明	計
発掘	950	1592	158	887		3587
表探	82			25	37	144
不明	59	8			1	68
計	1091	1600	158	912	38	3799

表1 田付遺跡のトレーン間の遺物（石器）点数（中沢・伊藤編[2021]表2-1より）。

	A地点	B地点	C地点	D地点	地点不明	計
細石刃	21	4	2	6		33
細石刃核	2	3		5		10
細石刃核削片	3	3				6
削片	11	3		3		17
彫刻刀形石器	5	7	3	6		21
彫刻刀形石器/ノッチ	2		1			3
彫器削片	2			1		3
搔器	8	13	3	8		32
搔器/剝器	1			4		5
搔器/彫刻刀形石器	1					1
搔器/剝器/彫刻刀形石器	1					1
削器	36	54	12	63		165
削器/彫刻刀形石器		1		3		4
削器/彫刻刀形石器/ノッチ				1		1
ノッチ	55	73	13	54		195
ノッチ/削器	2	2	1	3		8
ノッチ/搔器	3					3
鋸歯線石器	2	7	1	6		16
石鏃		2				2
石錐	2	1				3
尖頭器		1	1			2
両面調整体	3	20	1	7		31
片面調整体		3				3
舟底形石器		1		1		2
打面再生剥片	2	6		1		9
二次加工剥片	33	72	17	57		179
二次加工石刃	31	37	17	34		119
ストーンリッチャー	1					1
石核	20	50		1		71
稜付き石刃	3	4		1		8
石刃	114	204	29	150		497
剥片	548	982	54	462		2046
チャンク	16	26	3	8		53
斧形石器	2					2
磨製石器	1					1
礫	1					1
小礫	4	5		1		10
デブリ	13	7				20
シャター	1	1		1		3
計	950	1592	158	887	0	3587

表2 田付遺跡のトレーンごとの石器組成（中沢・伊藤編[2021]表10-3より）



図3 A地点の石器

1: 石刃核、2: 削器、3: 斧形石器、4: 磨製石器（棒状磨製石製品）、5: ストーンリタッチャード



図4 B地点の石器

1・2：細石刃核、3：細石刃核削片、4・5：両面調整石器（製作途次）、6・7：石刃核



図5 C・D地点の石器

C地点：1～3、D地点：4～7。1：彫刻刀形石器、2：細石刃、3：両面調整石器（石刃素材）、4・5：広郷型細石刃核、6・7：両面調整石器

山形県酒田市八森A遺跡 2021年度発掘調査

金彦中・瀧谷侑奈・傍島健太・戸塚瞬翼・谷津愛奈・趙娜・郭忻怡・グレコジエルマナ・
館内魁生・洪惠媛・鹿又喜隆（東北大学大学院文学研究科）
佐野勝宏（東北大学東北アジア研究センター）
渡部裕司（酒田市教育委員会）
佐々木繁喜（一関市文化財調査員）

1 はじめに

八森遺跡は山形県酒田市市条字八森地内に所在する（図1）。遺跡は庄内平野の東縁に接する出羽山地西端の低位段丘から中位段丘にかけて立地し、北側を荒瀬川が庄内平野に向けて西流する。八森遺跡は1977年から繰り返し発掘調査が行われ、これまでに後期旧石器時代から平安時代まで、複数の時期にわたる遺物・遺構が検出されている（佐藤・大川2003）。古代の官衙地区として調査された中位段丘上の建物群が注目されたが、この範囲は後に八森B遺跡とされた。また、後期旧石器時代から縄文時代にかけての遺物が多く出土した低位段丘上の桑園地区は、八森A遺跡として区別された。この地区では神子柴・長者久保文化に属する槍先形尖頭器や局部磨製石斧などと、後期旧石器時代後半期の石刀や東山型ナイフ形石器、エンド・スクレイバーなどが出土している。

東北大による2021年度の発掘調査は、八森A遺跡を対象としたものであり、特に神子柴・長者久保石器群の新資料を確保し、それらの分布範囲から年代測定試料を採取することで、旧石器時代から縄文時代への移行年代を解明することを第一の目的とした。

2 調査の概要

発掘調査期間は2021年9月21日～9月29日である。調査主体は東北大学大学院文学研究科考古学研究室（発掘担当者：鹿又喜隆）であり、東北アジア研究センターと酒田市教育委員会の支援を得て実施した。調査区を7つ設定し、その調査面積は合わせて約23.5m²である。遺物の取り上げはトータルステーションを用いて三次元計測を行い、出土位置・出土層位・器種を記録した。また、一部の遺物についてはデジタルクリノメーターを使用して産状（走行・傾斜）の計測を行った。

発掘初日の9月21日に、過去の調査範囲を把握するため、旧調査区の北端に当たる位置にTP01、旧調査区の東端に当たる場所にTP02を1m×3mの範囲で設定した。両区で表土掘削を進めると共に、機材搬入作業を行った。翌22日は、午前中は雨のため発掘作業が進まなかつたが、午後に酒田市教育委員会の文化財整理室にて城輪柵跡や八森遺跡の資料見学をさせていただいた。23～24日は各調査区を掘り下げ、TP01をさらに1×2m拡張し、合計5m²とした。また、TP02をL字形に1×3m拡張し、合計6m²とした。25日にはTP04～TP07の調査区を新設した。TP04が4.5×1m、その他が2×1mの調査区である。26～27日には各調査区の掘り下げと遺物の取り上げ、セクション図の作成を並行して行った。28日からは各調査区を掘り下げ、調査を終えた調査区からセクション図を作成し、順次埋め戻しを行った。29日の夕方に調査を全て終了した。出土遺物には石器・土器・炭化物などがあり、特にTP02とTP04から多く出土した。各調査区は3層もしくは4層上面で掘り下げを終了し、土壤サンプルの採取、セクション図の作成、記録写真の撮影等を行った後に埋め戻した。

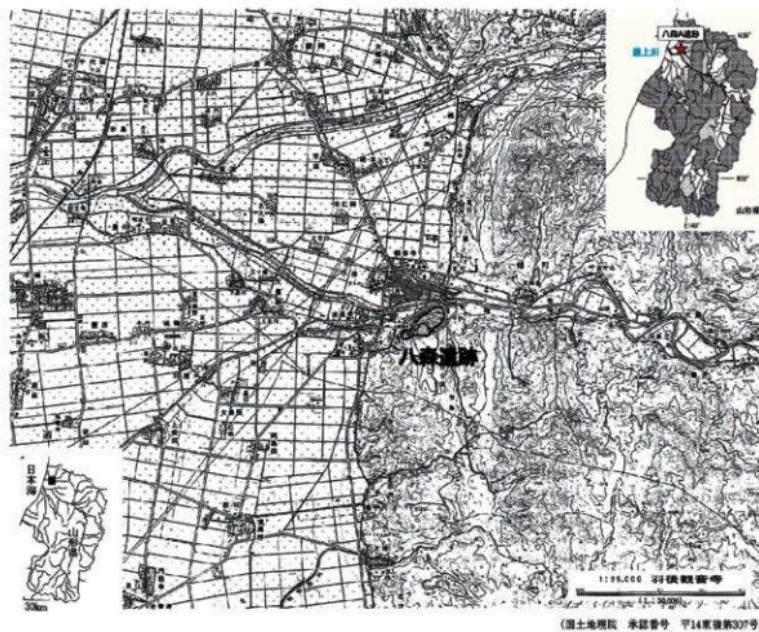


図1 八森遺跡位置図

調査区TP02とTP04の層序を以下に示し、基本層序の説明とする（図2）。

- 1a層 黒褐色シルト層。粘性が強く、1b層との境界に礫を多く含む。
- 1b層 暗褐色の粘土質シルト層。しまりが弱く、礫を比較的多く含む。
- 1c層 暗褐色のシルト質粘土層。粘性はほとんどなく、しまりも弱い。
- 2層 褐色シルト層。炭化物を1%未満含む。TP02では3層由来のロームを含んでおり、粘性・しまり共に1層よりもやや強い。TP04では粘性はやや弱く、しまりは1層よりも強い。遺物包含層である。
- 3層 黄褐色シルト質粘土のローム層。しまりは2層と同程度で、粘性は強い。2層よりも少ないが炭化物を1%未満含む。TP04では下位から大きな礫が検出された。
- 4層 褐色シルト質粘土層。粘性・しまり共に3層より強い。

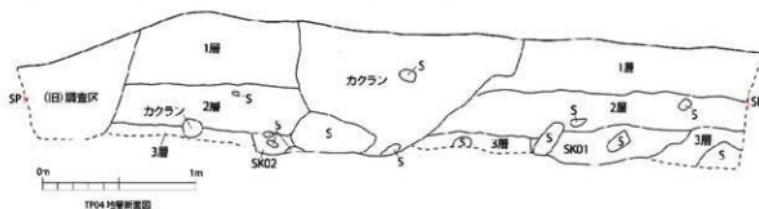


図2 TP04 の地層断面図

3 調査の成果

出土遺物 265 点に対して三次元測量を行った。遺物は 2 層から最も多く出土し、全体の約 7 割を占める。出土遺物の内訳は土器 143 点、石器 41 点、炭化物 70 点、礫 11 点である（図 3・4・表 1）。このほかに、表土や擾乱からも遺物が出土したが、表 1 や図 3・4 には含めていない。出土遺物の約半数は土師器であり、古代の遺物が中心であることを示している。石器は剥片がほとんどであった（出土石器の約 95%）。旧石器時代の遺物は主に TP04 から出土し、2 層からエンド・スクレイバー 1 点、サイド・スクレイバー 1 点が出土している。

出土石器については剥片・碎片がほとんどであり、定型的な石器は限られる。TP04 ではエンド・スクレイバーとサイド・スクレイバーが 1 点ずつ出土した（図 6-1・2）。エンド・スクレイバーは平坦打面より剥離された石刃を素材としており、背面の先端部と右側縁、腹面の右縁側に二次加工が施されている。サイド・スクレイバーは自然面を含む剥片素材で打面調整がみられる。背面の右側縁に二次加工が施されている。これらのツールはいずれも頁岩製であるが、石質の良し悪しがある。TP06 の表土では棒状礫を素材とした石斧の未製品が出土した（図 9-15）。刃部の剥離痕が複数みられる。石材は細粒凝灰岩である。図 6-3～8、図 7-9～11、図 8-12～14 は剥片である。それらの一部には、二次加工や微小剥離痕が認められる。図 6-4, 5, 6, 8 は黒曜石製である。頁岩製の剥片に比べて小型のものが多い。以上のように、典型的な旧石器時代資料はわずかであり、旧石器時代の包含層と考えられる 3 層以下から出土した確実な旧石器時代の遺物は認められない。また、ローム層との漸移層である 3 層の出土遺物も TP05 や TP06 といった旧発掘区の埋戻し土の直下から出土した遺物であり、プライマリーな状態を保っているとは限らない。後に述べる TP05 の 3 層から出土した炭化物の放射性炭素年代測定の結果も、遺物の所属時期の多様性を物語っている。

表 1 2021 年度八森遺跡出土遺物組成表（三次元測量による取り上げ資料のみ）

調査区	層位	エンド・スクレイバー	サイド・スクレイバー	剥片	礫	須恵器	土師器	縄文土器	炭化物	総計
TP01	3							1	1	1
TP02	2			18	3	1	123	4	56	149
TP03	3								1	1
TP04	2	1	1	14	5		11	1	4	33
TP04	3								3	3
	埋戻し土			1						1
TP05	3			5	3		1		5	9
TP06	1						1			1
TP06	4			1						1
	総計		1	1	39	11	1	136	6	70
										265

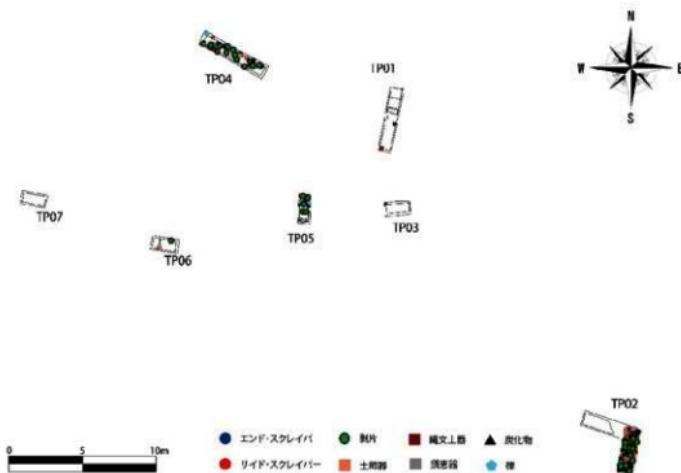


図3 調査区の配置及び出土遺物の分布図

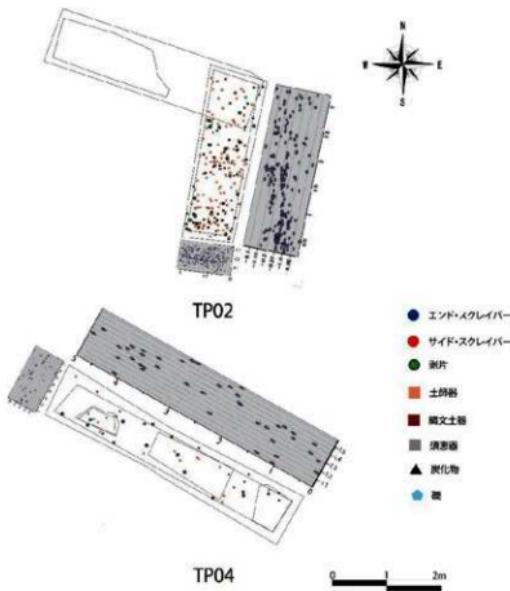


図4 TP02・TP04の出土遺物の分布図

4 自然科学的分析

(1) 放射性炭素年代測定

三次元計測によって出土位置が測量された 70 点の炭化物のうち 2 点に対し、(株) 加速器分析研究所に放射性炭素年代測定を依頼した（表 2）。このうち 1 点は、TP01 の 3 層から出土した縄文時代早期後葉の表裏縄文土器の内面に付着した炭化物であり、測定結果は $7,130 \pm 30$ ^{14}C BP である。もう 1 点は TP05 の 3 層出土の炭化物であり、前回の調査において神子柴・長者久保石器群が検出した地点であるが、測定結果は $5,000 \pm 30$ ^{14}C BP であった。IntCal20 較正曲線 (Reimer et al. 2020) を用い、OxCalv4.4 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用して曆年較正を行うと、TP01 出土の表裏縄文土器付着炭化物の年代が約 8,000～7,800 cal BP (2σ)、TP05 出土炭化物の年代が約 5,900～5,600 cal BP (2σ) となつた。TP01 から出土した表裏縄文土器は、縄文時代早期後葉に位置づけられ、年代値がある程度妥当であることを示している。また TP05 の 3 層中から出土した炭化物は、縄文時代前期の年代値となっており、神子柴・長者久保石器群の年代より大幅に新しい測定結果となつた。本遺跡では縄文時代の各時期の遺物が含まれており、この測定試料も該期の遺物に伴うものと考えられる。

表 2 試料の各指標値及び原産地判定

測定番号	試料 No.	採取場所	試料 形態	処理 方法	炭素含有 率(%)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{14}\text{C}$ 補正あり	
							Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-210870	62	TP01、3 層、表裏縄文 土器の口縁部内面	土器付着 炭化物	AaA	19	-22.45 ± 0.19	7,130 ± 30	41.16 ± 0.15
IAAA-210871	190	TP05、3 層	炭化物	AAA	66	-22.88 ± 0.20	5,000 ± 30	53.67 ± 0.18

測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用(yrBP)	1σ 曆年年代範囲	2σ 曆年年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA- 210870	$7,090 \pm 30$	41.38 ± 0.15	$7,130 \pm 29$	7978calBP - 7933calBP (64.2%) 7886calBP - 7880calBP (4.0%)	8014calBP - 7928calBP (83.5%) 7894calBP - 7871calBP (12.0%)
IAAA- 210871	$4,960 \pm 30$	53.90 ± 0.18	$4,999 \pm 26$	5839calBP - 5833calBP (3.6%) 5746calBP - 5660calBP (64.7%)	5889calBP - 5821calBP (20.9%) 5758calBP - 5651calBP (69.8%) 5626calBP - 5606calBP (4.7%)

(2) 黒曜石産地分析

出土石器の中には黒曜石製が 4 点含まれ、それらを対象に蛍光 X 線分析による非破壊の産地分析を行った。

測定は、岩手県一関市にある（公財）岩手県南技術研究センターに設置されたブルカーライエクスエス社製の上面照射型の M4 TORNADO エネルギー分散型蛍光 X 線装置で行った。X 線発生源はロジウム管球、検出器は Zr 半導体である。径 $25\mu\text{m}$ のコリメータを用いて $0.5 \times 0.5\text{mm}$ の範囲をマッピングし、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)などの 9 元素について測定した。管電圧は 50 kV、管電流は 400 m

Aとし、大気雰囲気で測定を行った。測定時間は360秒で、RO Iでバックグラウンドを差し引き、ネット強度により積分強度を求めた。また、厚みの薄い試料についてはアルミ板にのせ固定したうえで測定した。

測定の結果、試料4点はいずれも月山系IAと判別された（表3・図5）。山形県の月山とその周辺に分布する黒曜石は西川町の月山荘付近のもの（月山系II）と鶴岡市の羽黒山に近い今野川付近から産出するもの（月山系I）がある。本遺跡の黒曜石は月山系IAであり、遺跡の近くで獲得できる黒曜石である。

表3 試料の各指標値及び原産地判定

遺物番号	遺物名	出土地点	層位	Rb分率	Mn × 100/Fe	Sr分率	log(Fe/K)	判定	備考
163	剥片	TP04	2	30.6581	12.7754	25.3756	0.4179	月山系IA	角礫
173	剥片	TP04	2	30.8354	13.5302	26.3477	0.3935	月山系IA	
177	石核	TP04	2	31.6221	13.0771	27.1967	0.4158	月山系IA	円礫
243	剥片	TP04	2	31.2972	13.3844	26.9399	0.4046	月山系IA	

5 わわりに

今回の調査では、八森A遺跡の仲子柴・長者久保石器群の年代を明らかにすることが第一の目的であったが、当該期の遺物がほとんど出土せず、旧調査区の当該資料の出土地点の炭化物も縄文時代前期の年代を示す結果となった。したがって、当初の目的が果たせないまま終了したため、来年度以降に改めて調査計画を練り直し、八森A遺跡や他の遺跡の調査を通じて、この課題を明らかにしていきたい。

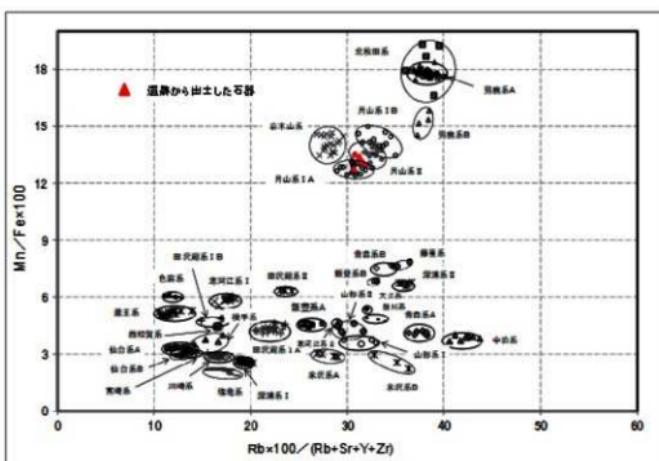
なお、八森A遺跡の発掘調査及び出土遺物の整理作業は、東北大大学院文学研究科・文学部の学生を対象とした「考古学研究実習Ⅰ・Ⅱ」・「考古学実習」の一環として行われた。発掘調査・整理作業には、執筆者以外に、学部生の大橋葵、木村隆也、車田茉由、後藤丞、佐原珠季、菅原暖花、梨本龍成、矢代真魁、結城駿、岩瀬暁子、楠裕人、佐々木晴、菅原わかば、高橋蒼、長岡彩幸が参加した。本発掘調査は、令和3年度科学研究費助成事業（17K03204）、令和3年度東北アジア研究センター共同研究、令和3年度ヨッタインフォマティクス研究センター研究助成の研究成果の一部である。

謝辞

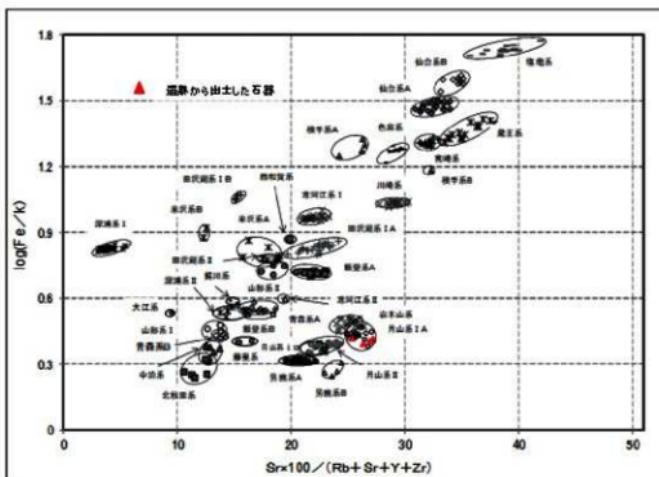
発掘調査にあたり、酒田市教育委員会および職員の皆様には、格別のご配慮とご支援を頂いた。また、青木要祐、青野友哉、阿子島香、阿部武志、植松晚彦、梅川隆寛、大川貴弘、大場正善、大類誠、柿崎智之、川口亮、川島崇史、菅野智則、木村恒、熊谷亮介、佐藤慎宏、渋谷孝雄、鈴木秋平、早瀬亮介、藤沢教、村井重良、八重澤忠郎、山口博之、山本睦の諸先生には発掘調査または整理作業にてご指導・ご支援をいただきいた。また、各種分析では、（株）加速器分析研究所、（公財）岩手県南技術研究センターにご協力いただいた。記して感謝申し上げます。

引用文献

- 佐藤慎宏・大川貴弘 2003『八森遺跡 先史編・先史図録編』山形県八幡町教育委員会
富士平工業株式会社 1969『新版 標準土色帳』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修
望月明彦 1997『盆光X線分析による中部・関東地方の黒曜石产地の判別』『X線分析の進歩 28』pp.157-168
Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
Reimer, P.J. et al. 2020 The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP), *Radiocarbon* 62(4), 725-757



八森A遺跡出土石器の判別図(1) Rb分率



八森A遺跡出土石器の判別図(2) Sr分率

図5 黒曜石産地分析結果

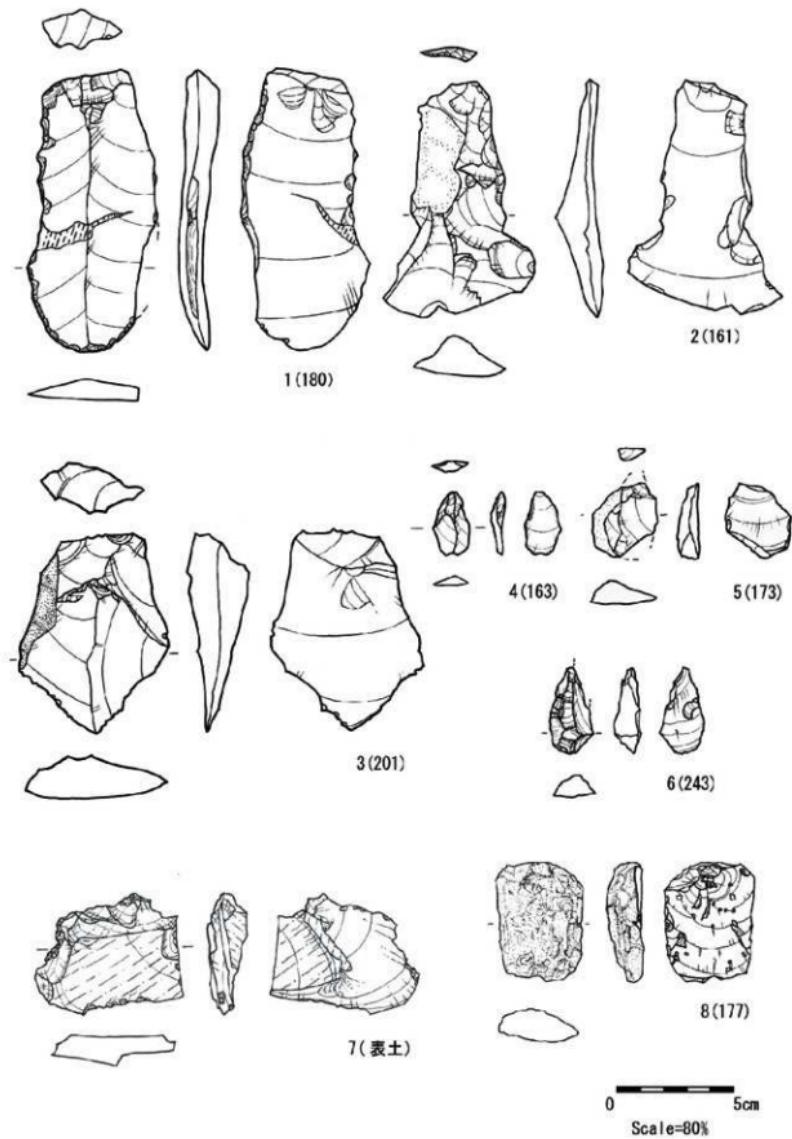


図6 八森A遺跡出土石器

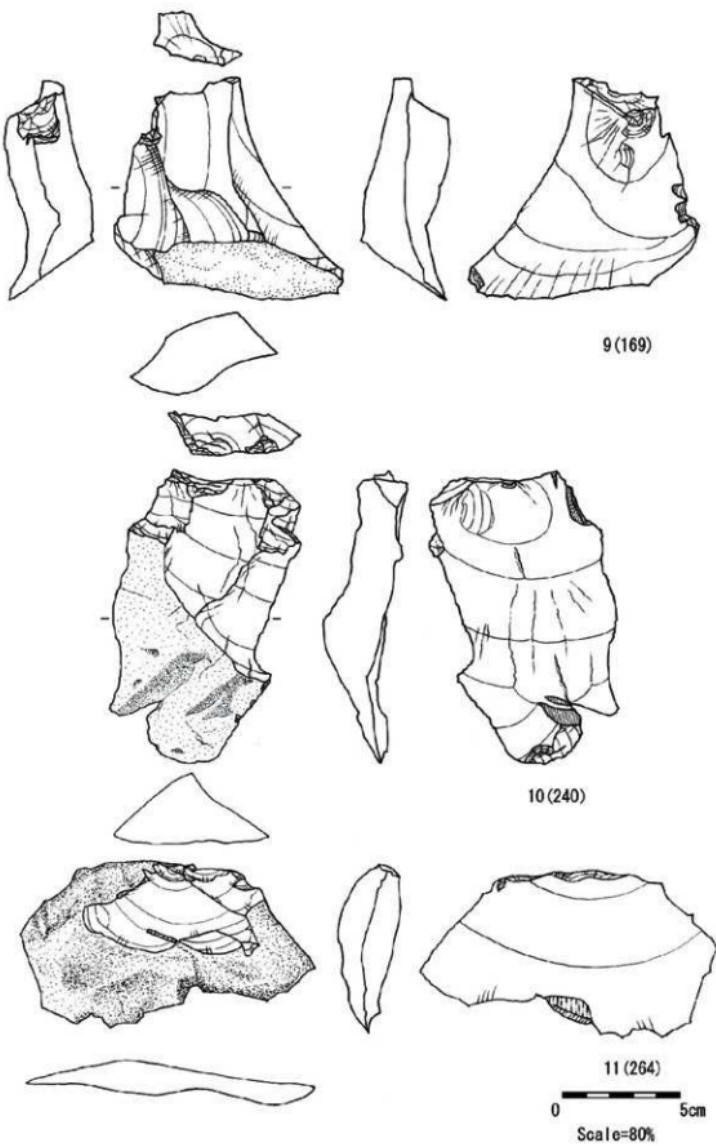
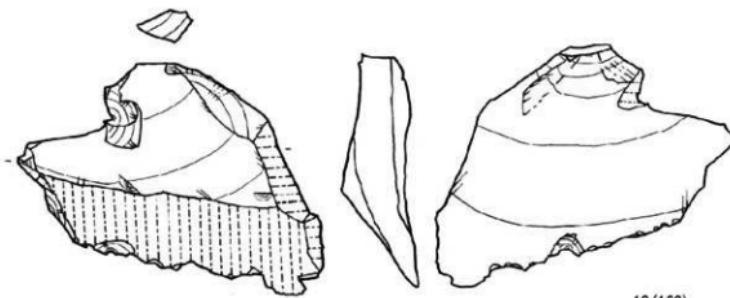
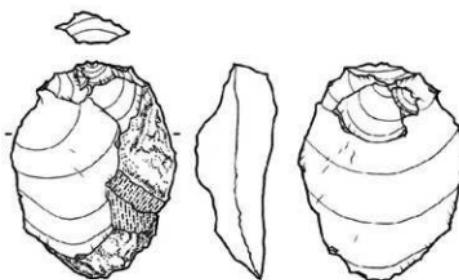


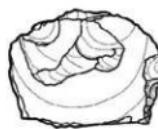
図7 八森A遺跡出土石器



12 (168)



13 (247)

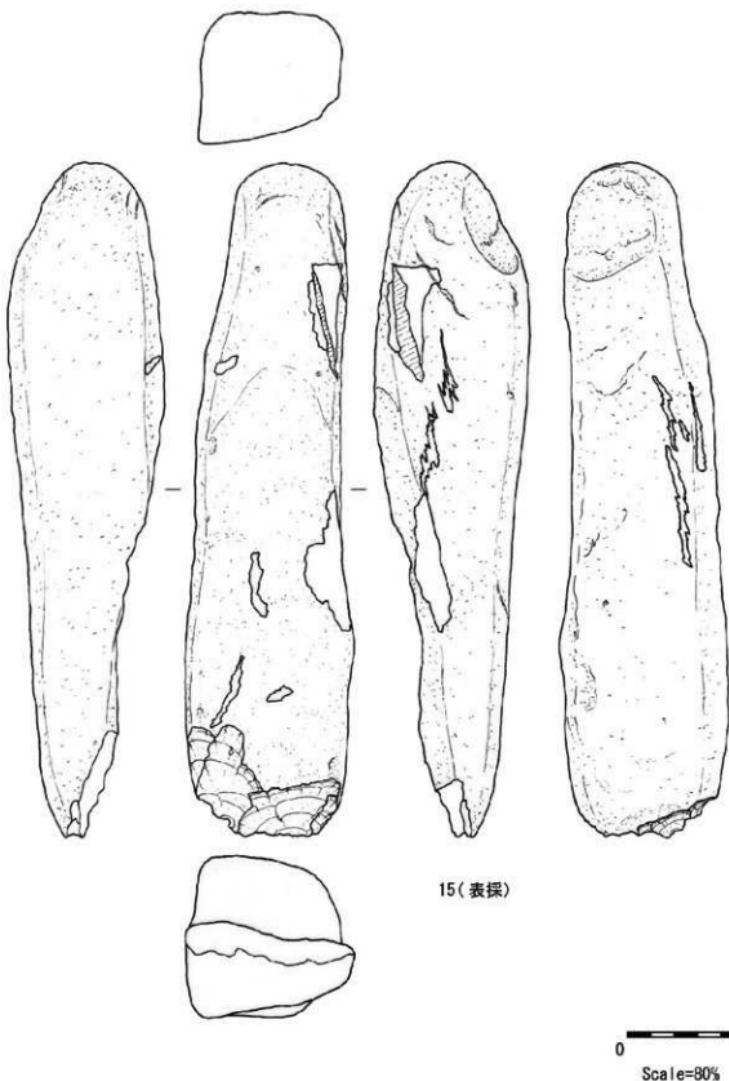


14 (表探)



0 ————— 5cm
Scale=80%

図 8 八森 A 遺跡出土石器



15(表採)

図9 八森A遺跡出土石器

第35回 東北日本の旧石器文化を語る会
＜予稿集＞

2021年12月25日 オンライン発行

編集・発行 東北日本の旧石器文化を語る会
(編集担当:鈴木 雅)
